



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	点検・評価小委員会及び教職課程担当教員会議について
Author(s)	教職課程専門委員会点検・評価小委員会; 光本, 滋
Citation	北海道大学教職課程年報, 16, 63-108
Issue Date	2026-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99336
Type	other
File Information	04_2185-9809_16_3.pdf



2026（令和8）年2月17日

教職課程専門委員会 点検・評価小委員会
委員長 光 本 滋

点検・評価小委員会及び教職課程担当教員会議について

1. 2025（令和7）年度点検・評価小委員会

委員長 光本 滋（教育学研究院）
委 員 関 あゆみ（教育学研究院）
林 琢也（文学研究院）
柳澤 達也（理学研究院）

第1回 2025（令和7）年5月23日（金）

議題

1. 教職課程の自己点検・評価について

資料1：「北海道大学教職課程自己点検・評価報告書（令和6年度）」

資料2：「教職課程の自己点検・評価の観点」

2. 自己点検・評価小委員会の活動について

(1) 北大の教職課程の点検・評価の方針の検討

(2) 教職科目の受講者アンケートの実施、および結果のまとめ作成

(3) 教職科目の改善状況の確認

(4) 教職科目担当教員会議の開催

3. その他

以下を実施することとなった。

○シラバスチェック（担当：柳澤）

・教職科目のシラバス（日本語）を匿名で相互におこなってもらう。2025年度は半数程度の科目に関して実施する。

・12月にまとめを次年度の科目担当者へ送ることができるように進める。

・資料として、教職科目・担当者一覧、教職科目シラバス一覧を用意する。

○教科教育法に関するアンケート（担当：林）

・国語、英語、社会・地歴・公民、のいずれかについて実施可能かを検討する。

・2023年度以前のアンケートの実施方法を確認する。

○「教育の基礎的理解に関する科目」に関するアンケート（担当：関・光本）

○自己点検・評価の全体と進捗を把握するために「教職課程の自己点検・評価の観点」を改訂する

○教職課程担当教員会議を2026年2月中旬に実施する。

第2回 2025（令和7）年12月22日（月）

議題（進捗状況の確認）

1. シラバスチェック（担当：柳澤）
 - ・教職科目のシラバス（日本語）を匿名で相互に行う。2025（令和7）年度は半数程度の科目に関して実施する。
 - ・まとめを次年度の科目担当者へ送ることができるように進める。
2. 教科教育法に関するアンケート（担当：林）
 - ・社会・地歴・公民について実施する。
3. 「教育の基礎的理解に関する科目」に関するアンケート（担当：関・光本）
4. 自己点検・評価の全体と進捗を把握するために「教職課程の自己点検・評価の観点」を確認し、改訂の方向を検討した。
5. 教職課程担当教員会議を2月24日（火）に開催する。

2. 教職課程担当教員会議

日時 2026年2月24日（火）14:45～16:15

場所 教育学部3階大会議室

議題 教職課程の自己点検について

教職課程に関する意見交換

教職課程担当教員会議

議 題

1. 教職課程の自己点検について
2. 教職課程に関する意見交換

配付資料

1. 点検・評価小委員会及び教職課程担当教員会議について
2. 教職課程の自己点検・評価の観点（教職課程の自己点検・評価及び全学的に教職課程を実施する組織に関するガイドラインより）
3. 教職科目の点検・評価について
4. 2025 年度 教職課程シラバス 相互点検結果報告
5. 2025 年度 教職科目の点検・評価に係るアンケート結果の報告
 - (1) 教科教育法（社会・公民Ⅰ）
 - (2) 教科教育法（社会・地理歴史Ⅰ）
 - (3) 教科教育法（社会・地理歴史Ⅱ）
 - (4) 教科教育法（社会・公民Ⅱ）
 - (5) 教職入門
 - (6) 教育制度論
 - (7) 教育心理学
 - (8) 特別な教育的ニーズへの理解と対応

第 4 回 教職課程担当教員会議の記録

日 時：2026 年 2 月 24 日（火）14:45-16:45

場 所：北海道大学大学院教育学研究院 3 階大会議室

出席者：15 名

辻 智子（教職課程専門委員会委員長、教育学研究院長）
光本 滋（教職課程専門委員会 点検・評価小委員会委員長、教育学研究院）
関 あゆみ（同委員、教育学研究院）
林 琢也（同委員、文学研究院）
柳澤 達也（同委員、理学院）
相庭 達也（非常勤講師）
浅川 和幸（非常勤講師）
上原 慎一（教育学研究院）
奥村 稔（非常勤講師）
片山 礼子（非常勤講師）
川瀬 雅之（非常勤講師）
近藤 健一郎（教育学研究院）
鈴木 孝紀（理学院）
張 揚（教育学研究院、教職課程委員）
山崎 貴史（教育学研究院、教職課程委員）

光本：2025 年度の教職課程担当教員会議を開催したいと思います。全学の教職課程専門委員会のもとにあります点検・評価小委員会の今年度の委員長を務めております、教育学研究院の光本と申します。本日の進行を務めさせていただきます。教職課程専門委員長の辻先生から開会にあたり一言お願いします。

辻：本日はよろしくお願いします。年末のお忙しい中、先生方にお集まりいただいたんですけども、ふだんなかなかご意見を伺う機会がないものですから、是非お聞きしたいと思います。よろしくお願いします。

光本：本日はここに書いてあります二つの議題、次第に沿って進めていきます。まず、教職課程の自己点検・評価について、小委員会の方からご報告をさせていただきます。確認とか質疑がありましたら併せて承ります。その後、教職課程に関して、参加の皆様の意見交換をしていただきたいと思います。

では、続けて、点検・評価小委員会の方から報告させていただきます。2022（令和 4）年度から教職課程の自己点検・評価をおこなうことが義

務づけられました。それに対応して、北大の教職課程の点検評価を進めていくために、先ほど申し上げたように、全学の教職課程専門委員会の下に自己点検・評価小委員会を置くこととしました。

2025 年度の点検評価小委員会のメンバーは、委員長が光本、委員は教育学研究院の関先生、文学研究院の林先生、理学院の柳澤先生の 3 名です。この 4 名で今年度の点検評価の進め方について検討し、いくつかのことを実施してきました。

2025 年 5 月に第 1 回目の委員会を開催し、年間の進め方を議論しました。その結果、今年はシラバスチェックを新しくやろうということで、後ほどご報告いただきますが、教職課程担当されている先生方に毎年シラバス書いていただいていますけれども、他の教員の目から見てどうなのか、相互に点検し合うことにしました。それから、教職科目に関するアンケートを、2022 年からやっています。今年もいくつかの科目についてアンケートを行うことにしました。今年度は教科教育法の社会、地歴、公民、それから「教育の基礎的理解に関する科目」という教職科目のくくりに含まれる科目を対象にすること

にしました。

それから、これまで進めてきた教職課程の自己点検・評価を一覧にしたものが、お配りした資料、「教職課程の自己点、自己点検評価の観点」です。

これは、自己点検・評価が義務づけられたときに、文科省から自己点検・評価のガイドラインというものが示されました。これを参考に各大学が教職課程の点検をやってくださいということで示されたものです。

この表の中で一番上の欄に黄色がついているのがガイドラインに示されていることです。右側にある「学内対応」というのは北大で何をやるかということです。北大でガイドラインを参考にしつつ、こういうことをやったらいいんじゃないか、あるいはこれはもう済んでいるというようなことを一覧にしてまとめたものです。

この一覧は 2022 年の 4 月 12 日にいったんまとめたんですけども、それから三年余り経ってしまっていて、今年度は改訂しようということになっているんですけど、まだ書き直しは済んでいません。このあと進んだことの一つに、「点検・評価実施方法」という列の中ほどから下のところに教職課程担当教員会議というのがありまして、本日の会議のことです。北大の工夫として実施しようということになったものです。この会議も 4 回目になり、それなりにやってきています。

これなどもご覧いただきながら、もうちょっとこういうことをやったらいいんじゃないかとか、やったことが生かされているとか問題があるとか、いろいろ議論の素材にさせていただければと思います。

先ほどの資料に戻りまして、12 月に第 2 回目の小委員会を開き、シラバスチェックとアンケートの進捗状況を確認しました。先生方もお忙しいので、こういう機会に突貫工事でやったという面もあります。そして、後ほどご報告いただきます資料をまとめまして、と、本日の教職課程担当教員会議を開催することもこのとき決めましたので、そこに報告しようということで、進めてまいりました。

引き続きまして、今年度の柱にしましたシラバスチェックと科目のアンケートの状況について、それぞれ担当いただいた先生方からご報告をいただきたいと思います。では、柳澤先生、お

願いたします。

柳澤：理学院、柳沢と申します。よろしくお願い致します。

本年度、点検・評価小委員会の委員として、教職課程の点検について議論してきたところです。その議論の中で、私、令和 5 年度に物理学科の教務委員をやっておりまして、そのときにシラバスチェックを行ないました。その手法がそのまま使えるので、応用してはどうかと提案したら、お認めいただいたので、今回と同じ手法でやってみたということです。

調査の目的としては、1 枚目に書かれておりますが、第三者の目を見て品質の向上を図るのが、これは建前でありまして、理学部でやったときにも、2 つ目の黒丸が隠れたシグナルで、普段他のシラバスをよく見ることはあまりない先生もいらっしゃるということで、他の先生の書かれたシラバスを見る機会が得られるということだけでも物理学科の方では効果がありましたので、そういった観点でやってみました。

互いのアラを探す作業けしからんとおっしゃられると思って、ちょっとヒヤヒヤしたんですが、そんなことはなくて、物理学科では、すごく辛辣な意見が飛び交うんですけども、こちらの教職課程に関しては、総評を先に述べさせていただきますと、辛辣なコメントは少なかったです。これは多分に文化の違いなどがあると思ったんですが、教職課程をやられている先生は、やはり寛容な方が多い。それから教職課程のシラバスの基本構造自体は現状クオリティが高かったので、あまり直すところがなかったというところもあります。

ということで、時間も限られておりますので、要点をまとめてかいつまんでご報告させていただきます。調査の概要については、「2025 年シラバスチェック対象講義一覧」ということで、ここに出されているのは教職課程の授業科目全部です。このうち緑色でハッチングされたもの、33 件のみ今回実施しました。残りの 31 件は、もしやるなら来年実施したらいいのかなと思います。何で 33 かと言いますと、この一番右側の欄にあるシラバス入力担当世話教員というのが、光本先生とか、かなり多くの授業を担当されているので被ってらっしゃるんですが、全部カウ

ントすると 33 名いらっしゃったので。それと各講義のシラバスを最低 2 名で見るようにランダムに配分し、シラバスチェックをしていただきました。

手法としては、一番最後のページにございます、資料 2、「共有したチェックリスト(理学部)」。

これは理学部の許可を得ずに勝手にシェアしたんですが、理学部ではこれを基に、総合チェックをおこないました。これをそのまま使ってみたらどうかということで、これをまず先生方とシェアし、さらに、シラバスを PDF の束にさせていただいて、それを皆さんとシェアした。

ここが大事だと思います。PDF の束でシラバスって今持っている人はあんまりいないです。システム上では見るんですけど、検索に行かないやいけない。私昭和の人間なんで、やっぱり紙媒体で見たいというのがあって。それを印刷して持っている、今後参考にすることもできるということでございます。

2025 年 12 月 10 日に一斉でメール送信しております。これはランダムに査読者を割り当てて、要は査読者がわからないようにメールを送りました。そして Google フォームで集計しております。

その報告書が今回のこの報告書でありまして、これを教職課程の先生方とシェアすることで目的を達成されるのかなと思っております。

1 枚めくって、総合結果のところをご覧ください。回答数 53 件、大体 85% の回答が得られていまして、かなり良好ではないかと思っています。それぞれのチェック項目、先ほどの理学部のチェック項目に対して、まずは、この条件を満たしているかどうか、OK かどうかというのを答えていただきました。そうすると、概ね 1 から 4 は OK ということで、基本構造はしっかりしているということがわかります。建設的なコメントが多くて、本シラバスチェックを通して互いに高め合おうという意図が見られて、とても見ていて勉強になりました。

改善傾向が見られた点ということで、項目 5、6、7、8 だけかいつまんで、ここに書いてあります。項目 5、到達目標について、授業の目標に関しては、何なにについて理解する、何なにの素養を深めると書いてもいいんですけども、到達目標到達点に関してはもうちょっと具体的に書いた方がいいという流れになります。ですから、

理解する素養を深めるという書き方ではなくて、何とかについて知り、説明できるようになるのですか、何とかについて学び、何とかできるようになる、「できる」という形式にするということが求められています。それが何個か、そういったものではないものが散見されたということです。

1 枚めくりまして、項目 6、到達目標と成績評価。ここ難しいところなんですけれども、中のコメントの中で、ループリックを使ってはどうか。ループリックとは、評価方法と基準をそれぞれクロス表にしたフォーマットで、東大とかでは使っているらしく、それを載せると一目瞭然じゃないかという意見がありましたが、現状の北大のシラバス入力システムは図とかを載せられない仕様になっているので、これはシラバスシステムの改修を提言してもいいかもしれません。ただ、テキストベースでもできますし、もし可能なら画像の添付や TeX 形式、理学部、医系はよく使う TeX 形式を使えば表も作れますので、そういったものを使えるように提言をするのは一つかなと思います。

項目 7、準備学習の記述、これも皆さんご存じだと思うのですが、2 単位は 90 時間の予習復習の学習時間の確保が求められております。そこで予習は課さないと書いてあるとアウトなわけですね。なので、予習はちゃんとその内容を示すということが求められています。

項目 8、これもよく言われることですが、出席点というものを明示してはいけないということです。授業への出席状況を点数化して、具体的に評価に用いることはできないことになっていますので、ここは気をつけていただければと思います。それ以外の部分に関しては概ね良好でした。

まとめもありますけれども、最後の方に、いくつかピックアップしたご意見が羅列されておりますので、これはお時間あるときにお見通しいただければと思います。

この最初にあります、「授業計画が 14 回しか記載されていない」。これは理学部の時も毎回僕指摘していたんですが、シラバスでは期末テストを除いて 15 時間の授業時間の確保が求められておりますので、14 回と書くところよくないわけです。その他は読んでいただければ分かるようになっておりますので、お目通しただけ

ればと思います。生のデータに関しては、トップのページの QR コード、もしくは Google のスプレッドシートのリンクからダウンロードできるようになっています。チェックした人の名前は分からないようになっていますので、これを見ていただいて、それぞれの講義でどういうところが指摘されているのかを興味のある方は見ていただくと参考になると思います。これをシェアすることでまとめとさせていただきます。

まとめとして、もう一回同じことを繰り返しますが、教職科目のシラバス構造は高水準で整備されていることが今回分かりました。理学部は結構独創的なシラバスを書いている先生がいたので是正されたんですけど、教職課程は全く問題なかったです。あとは教員間でもこういった 14 回ですとか 90 時間という、そういう記述様式の理解は共有されているように見えました。一方で、これからはその点検から改善のプロセスになっていくと思うので、より良くするにはどうしたらいいかを今回のサーベイの結果を基にやっていくことが重要課題かなと思います。以上でございます

光本：どうもありがとうございました。ひと通りご報告してから、全体の質疑や討論に移りたいと思います。では、引き続きまして林先生お願いいたします。

林：文学部の林です。よろしくお願いいたします。

22 年度から教職課程を開設する大学に自己点検・評価を行うことが義務付けられたということで、昨年度と同じ項目で、今年度は教科教育法の中で、私自身も地理学の授業を持ったりもしていますので、教職の教科に関する科目に関してはその一翼を担っている側面もあります。担当の先生のご協力をいただいて、点検を行うというふうな形になりました。対象科目としては、その下のところ①から④の教科教育法の社会・公民ⅠとⅡ、それから社会・地理歴史ⅠとⅡの 4 科目になります。

もう 1 枚の紙の「教職科目の点検評価について」ということで、辻委員長の名前が付いている依頼文を、昨年の 6 月にアンケートの趣旨とそれから担当される非常勤の先生は面識がない方々でしたので、ご挨拶も兼ねて、私の方から

メールを送らせていただき、授業の中でアンケートの実施に対する協力をお願いをしました。

四つの科目とも先生方から承諾をいただきましたので、こちらで作成した Google フォームの QR コードと URL を送って、授業の中で受講生に回答してもらうという形式を採用しました。私の方でこの日にやってほしいということではなくて、授業の流れもあるでしょうから、空いているところだったりとか時間をうまく使えるところで、前期の科目は 7 月のどこかで、後期の科目は 1 月のどこかでというような形をお願いして実施していただきました。

以下は 4 科目それぞれの集計結果を整理したものになり、簡単ですけども、四つの科目の特徴について少しお話ししたいと思います。

アンケート結果の整理①、「教科教育法(社会・公民)Ⅰ・Ⅱ」を見てください。履修者数 39、アンケート回答者 25、回答率 6 割ちょっとです。「履修前にこの授業に期待していたことを教えてください」で、多かったものは、教科指導の方法とか、授業の作り方であったりとか、準備の仕方というところのハウトゥー、そういうところが一つ。それから社会科、あるいは公民の授業ですので、社会科は公民の思考をする上での理念とか基本的な考え方とか、そういった部分をしっかりと押さえるべきということ。それから、実利的に教職の単位を取るためという、正直な回答が一つありましたけれども、こういったものが上位に挙げられておりました。

2 枚目に移りまして、「この授業を受けて、この点がよく分かった身に付いたことについて」です。授業の中で何を伝えるのか、伝えようとする姿勢の大切さ、それから社会科を学ぶことの意義とか理念、社会科教師として持つべき意識だったりとか、社会に対する向き合い方、主権者教育の重要性和難しさということで、どちらかというと社会科という科目の特性もありますけれども、社会科をどう教えるかというよりは、社会の様々なこと、価値観とか様々なものがある中で、本質的なことを考える機会になったというのが多かったかと思います。

「印象に残ったこと」としては、上位に挙げられているのは模擬授業の中での模擬投票とか授業見学ですとか、そういったものが多いです。それから用語の理解とか捉え方ということで、主権者教育、平和主義とか、利権主義とはとか、

多分一問一答的な意味ではなくて、もうちょっと本質的にこういったものをどう理解するかということなんかをよく考えたということみたいでした。

もっと「このような点について教わりたかった」というところでは、ハウトゥーなことで、指導案の作り方、授業のコツ、方法論的な部分という回答が複数ありました。あとは自由記述がちょっとあるという形でした。

「この授業について不満に思ったこと」は、4人とも100%、「不満、改善点はない」という答でした。

全体の満足度というところについては、下の表を見ていただきますと、「よかった」が全体の7割近くで、「どちらかといえばよかった」を含めると10割近くが非常に高い評価をしていることがわかります。

履修全般においてこのようになればということに関しては、現場の実際をもっと知りたい。それから、他の授業のコマと被らないように配慮されているのがあるがたいので続けてほしいと、二つ目の方もゼミと被らない時間帯に開講してほしい。この授業は午前なので問題なかったが、ということで、他の授業を含めた要望なのかもしれませんが、自分の所属している研究室なり、学科の必修必須の科目との兼ね合いみたいなことですね。下の方に移っていくと、卒業単位入れてほしいとかですね。そういったものもありますし、「特になし」の上のところですね。これは私が担当しているのもありますけれども、地理学、歴史学という教職の必修科目は、オンデマンドで受講できるようにしてほしい。そうすれば、学部の特修履修とも両立できる。地理学とか歴史学で開講している科目自体は、そもそも専門科目として文学部の中で開講されている科目で、社会科の免許を取る上でも必要な科目になるから、教職科目の中に入ってますけれども、これ自体を専攻、つまり地理学とか歴史学を専攻している学生からすると、教職取る取らない関係なく、彼ら彼女らからすればこれ自体が専門の履修科目なので、制度の中の位置づけを理解していないか、あるいはちょっと独善的な回答なのかなと思ってしまいました。なので、ここはあんまりかなと思いましたが、全体的に多分他の授業との兼ね合いみたいなところについてはいろんな意見があるのかなと思います。

ました。

考察としては、全回答の9割近くの回答者が「よかった」、「どちらかといえばよかった」を回答、選択していて、満足の高い状態であることがわかります。

アンケートからは、多様な価値観とか考え方がある中で、授業で何を伝えるか、伝えようとする教員の姿勢の重要性といった社会科の教員としてのあるべき姿とか、意識、社会に対する向き合い方など、単に知識を教わるだけじゃないような本質的な部分ですね。こういったことを考える授業が行われているんじゃないかということがアンケート結果から推察できます。

一方で、ハウトゥーですね。授業、指導の作り方とか、授業計画の作成といったようなところを学びたかったという回答もありますけれども、授業の中で全てをこれを習得するのはなかなか難しいのかなと思いますので、回答者が書いてくれているこの内容は、強いて言ばという程度のような気がします。不備や改善点はないというところの回答が100%であることがそれを物語っていると思いました。

二つ目、4ページ目に移りまして、「社会・地理歴史Ⅰ」、こちらも履修者45人、アンケート回答者17人、回答率は大体4割弱です。

期待していたところに関しては先ほどと似ています。授業を面白くする工夫とか、指導方法、授業の作り方といったようなものと、三つ目の教員の心構え、気をつけることといったハウトゥーとか、あるいは社会科教師として、教員としてというところの本質的なところを考えるようなものが上位には混在しています。

身についた、よく分かったという二つ目の問いに対する回答は、組み立ての仕方だったりとか、工夫、授業材料の準備、材料の重要性というふうなところの部分と、生徒一人ひとりを尊重することの大切さだったり、そのための教員の振る舞いというふうなことの仕方みたいなことについてよく考えた、身についたということでした。

問3、印象に残っていることとしては、一番高いのは生徒を一人の人間としてリスペクトする姿勢とか、主体的に生徒が授業に参加するための方法とか、そのために教員の作り出す空気感みたいなものの重要性というのが非常に高い評価がありました。おそらくそういったことをよ

く考えたり、あるいは担当の先生の普段の振る舞いから、学生がそういったところを感じ得るというような形が授業の中では多かったんじゃないかなということが推察できます。

このようなことについて教わりたかったという問4の最後のところは「特になし」が二つ、あとはコメントを書いています。

5 ページ目、この授業について不満に思ったこと、改善すべき点。これも4票ですけれども、グループじゃなくて個人で授業をしたいとか、時間帯の問題みたいなことも書いていますが、概ね特に問題点とか不安ということはないのかなと思います。

その部分は問6にも反映されておりまして、「よかった」という5点満点の5が80%以上。「どちらかといえばよかった」を含めると100%になっています。

問7の回答は先ほどの1個目のアンケートと同様、自分の学部研究室の必修あるいは必須の科目との重複についての改善依頼みたいなところと、それから卒業要件に入ってくれるとありがたいというのが複数ありました。

全体の考察としては先ほどの授業と同様、非常に満足度が高いということがわかり、重複しますが、教員が生徒を尊重する姿勢とか、主体的に授業に参加してもらうための工夫や共感を生み出すということが授業の質の向上につながるということを回答者が感じているということからも、この担当者の先生の日々の授業の中で、そういったことを俯瞰している学生が捉えて、自分が授業をする場合には置き換えて、そういったふうにするのが重要だということを考えられるようになっていくところはすごいかなと思いますながらアンケートの結果を読んでおりました。

一方で、アンケート回収後に授業担当の先生からいただいたメールのコメントを参照しますと、出席率が高くて意欲的な受講生がおそらくアンケートに回答してくれている。今回4割ぐらいの回収率でしたので、ということでした。そうではない学生との二極化が進んでいるところが少し気がかりだというふうなことを授業担当の先生からリアクションとしていただきました。この点は、出席率とか授業への意欲が必ずしも高くない、高いとは言えない学生の声とか評価も把握できれば、もちろん場合によってはそういった学生の意見も参考にすれば、重要内容

の改良とか受講生全体の主体性を高めることに、もしかしたら寄与できる可能性もあるかもしれないと思います。

なので、こちらがお願いをしてアンケートしてもらっていますが、点検・評価委員会のアンケートの仕方ですとか、聞き方みたいなところの形をもう少し回収率を上げたり、あるいは意欲的かどうかであったり、受講態度みたいなこと、受講の参加頻度、そういったところなんかも反映したような形で考察ができると立体的に見れるのかなと思ったりもしました。

6 枚目に入りまして、個人の方は回収率があまり良くなかったようですので、ページ数が短くなっています。三つ目の授業ですけれども、履修者数30でアンケート回答1ということなので30分の1、3.3%になります。なので、参考意見として理解するのが適当かなと思います。

履修前に期待していたことは「特になし」。この授業を受けて身に付いたことは、歴史認識に関することだったりとか、印象に関してもそうです。このようなことを教わりたかったのは「特になし」。満足度は5で一番高いというような形になっていました。

社会・地理歴史の教育法でもありますので、歴史観とか歴史認識に関することについて受講生がいろいろ考えるような場面や内容が盛り込まれている授業であるということが推察されます。不満、改善点はなく、回答者は1名なのであれですが、満足度の高い需要内容であるということがわかります。他方で、満足度の高い受講生が1人回答してくれたということになってしまいますと、他の出席率の高い学生だったりとか、意欲的な学生、それから興味関心の低い学生の声などがやっぱり反映できていないというところがあるので、どうしてもちょっとこの授業に関してはそのアンケートの実施法も含めてですね、検討が必要かなと思っております。

最後になります。「教科教育法(社会・公民)」。

こちらアンケートの回収率が高くて、履修者数35人、回答者4人、回答率11.4%でした。こちら参考程度に理解するのが適当かなと思います。

期待していることとしては、授業の実践教育法を身につける。それから、社会にある問題をいかに社会科教員の視点から伝えられるのか、指導法を学ぶことということで、先ほどの部分

と似ています。ハウトゥーの部分と、それから社会科教員としてのという本質的な部分の両方を考えるきっかけにしたいというところが上位に挙がっています。身に着いたところもそれと連動していますので、グループワークの工夫だとか、基礎知識、現場の実情、具体的な指導法というところがよく分かったという回答でした。印象に残ったところとしても、それとそれに連動しているので、授業構成の工夫、特にグループワーク、模擬授業とか、そういったところが挙がっています。問4のもっとこのような点について教わりたかったは、倫理の指導法というふうな書き方が一つだけ書いてありました。問5で不満改善点というところについては、資料をたくさん配っていたが、それを消化する時間がなかったというのが一つ挙げられていました。最後の8頁に入りまして、この授業の満足度も比較的高いんですが、一人だけ2としている人がいるので、そこの評価がいろいろ分かれるところがあるのかなということで、後の考察のところでも少しまとめたと思います。問7ですね。このようになれば良いというところについては、もっと実践事例が知りたいというところだったり、学生のニーズに応えつつ、実習に苦勞する方々が減るようにというところは、どちらかというとりやすい時間帯とかの話なので、内容じゃないかもしれませんが、この2つが注文としては挙げられていました。

ということで、この授業も4票の回答なので、全体の傾向としてなかなか語りにくいところがあります。平均すると4.0ということで、概ね満足の高い結果になっています。「どちらかというと、よくなかった」を選択する回答者もいましたが、あくまで4人中の割合でしかないので、4分の1というところであれですけれども、あくまでごく少ない人数の中の割合になると、あまり割合の意味はないかもしれませんのでこういう書き方をしています。グループワークの工夫や、公民を教える上での基礎知識や現場の実態、教員の視点や指導の方法については、回答者は理解を深めたことがわかる。また、公民分野で扱うべき学習内容が政治、経済とか現代社会とか、大きくとらえるといろんなものが倫理以外にもありますので、広範なこともありますので、もっとこのような点を教わりたかったとの設問の回答として、倫理の指導法が挙げられていた

んですけれども、公民分野を教える上で通底するというか、汎用性のある指導方法や見方、視点みたいなどを学習者がコツを掴めば、扱う内容をすべて網羅していなくても、どう料理しながら授業で伝え教えるかというところについては、汎用性、応用性のあるようなことが身についてもらえるんじゃないかなと思います。なので、この点は充実した配布資料を消化する時間がなかったという回答ですとか、いかに社会の問題を捉え、授業を構想をするのかを考える機会が他の授業よりも少なかったという記述もありましたが、こういったものが個々の学生の努力とか工夫次第で何とかなるものなのか、それとも授業において改善の余地があることなのかは4票しかないので、判断は難しいというふうな表現しかできないかなと思いました。

ということで、私の担当した4科目の全体を通してですけれども、受講生の反応、評価は大きくとらえると、4科目とも4以上の評価が高いということもありますので、総じて高く、授業自体の満足度やそこから得られる知識や視点、社会科教育の授業の中で身につけるという意味からは十二分に教職課程に必要な要素、内容を扱っているんじゃないかなとアンケートからは言えるかと思いました。

内容の部分これからどう工夫するかみたいところは、なかなかアンケートの結果からは言いにくいところがあります。この四つの教科教育法の知識とか経験を整理したり、融合したりとかするような、教育実習の前段階としての部分をフォローするようなことを手厚くするような機会を充実させることが重要なのかなというふうに思ったりしました。

項目が多く長くなりましたけれども、私の方からの報告は終わりとさせていただきます。

光本：林先生、ありがとうございました。

報告が続きますが、「教育の基礎的理解に関する科目についてのアンケート」です。科目群毎にアンケートを実施していこうという意図なんです。普段あまりこの科目群だからということを担当の方はそんなに意識してないんじゃないかと思うんですけれども、柳澤先生の資料にありましたように、教職科目はたくさんありますので、これを一つずつやってると何十年もかかってしまう。ですから、ある程度の括りで進

めざるを得ないということがあります。それから、ランダムにやるのもどうかと思いますので、一定の括りを設けてアンケートをやることがまあよかろうということで、今年度はこの科目群をやろうと、この括りでやろうと考えたわけです。

アンケートを行った科目の一つは「(5)教職入門」。これは私が担当している科目でして、自分で担当して、自分でアンケートを取って、自分でまとめるのは出来レースというか、そういうことはしていないつもりですけれども、それにしても、分析が果たして客観的にできているか、いろいろ問題はあるなと思いました。やっぱり違う人に見てもらう方が良かったなと反省しているところですが、とりあえずご報告します。

科目の位置づけ、内容については、入門科目ということで、1年生がとれる数少ない教職科目で、非常にたくさんの方が履修しております。私はこの科目を担当するのは7回目です。毎年工夫しているつもりですが、自分としてもちょっとマンネリ化しているなと思わなくなかったので、アンケートを取ったことは自分自身にとってはとても良い刺激になりました。

アンケートは、2学期の科目ですので1月に入ってから実施しました。2クラス行っていて、履修者数はそんなに変わらないんですが、回答は1限の方が45人だったのに対して、5限の方は86名ということで、回答者数、回答率とも5限の方がかなり高くなっております。この差がどうして生まれたのかは少し考える必要があるかなと思いました。

回答結果につきましては、先ほど申し上げましたように、自分がやっている科目ということもありますので客観的かわかりませんので、ChatGPTに聞いたものも資料として配付しました。ただデータを上げて、「分析してください」と指示しただけなので、これも、それでいいのかというのはあるかもしれませんが、参考としてお読みいただければと思います。

私自身の感想といいますか印象は、概ね肯定的に受け止めてくださった学生の方が多くて、ホッとしています、それ以上に、学生がどこが印象に残ったかとか、何を学んだかということの記述が、ゲストスピーカーの講義に関するものが多いのですが、他の回にもかなり散

らばってしまして、ほとんど漏らさず書いてて、人数が多かったからということもあるのかもしれませんが、私としては意外でした。このこともよかったなと思っています。

記述については分量が多いため全部載せられませんので、抜粋したものを載せています。一つだけ触れておくと、「授業内容で、印象に残ったことや感想」の最後の回答、「光本先生が毎回の授業で批判的思考を大切にされていて、とても面白かった」という意見があって、私は教職の問題を取り上げていくと、どうしても批判的にならざるを得ないと思っているものですから、そういうつもりでやってきたんですが、評価していただいたのは嬉しかったのですが、「不満に思ったこと・改善すべきと思ったこと」の最後の回答では、「先生の講義内容は面白いのですが、現代の教育に批判的すぎて聞いていて少しつらくなるがありましたので、多少控めにしてくださいありがとうございます」と。批判性ということではどちらの学生も感じているようなんですけど、評価は分かれているようでして、更にどうしたよいか工夫が必要だと思ったところでした。

学生の方から改善意見もいろいろ出されています。特に私が大事だなと思ったのは、「アウトプットの機会をもう少し設けてほしい」というのがありました。授業内では隣の教師と話し合ってくださいみたいな時間を、よく取っていたんですが、それだけで終わってしまっていて、もう少し書くことによって自分の考えをまとめていく機会があると良かったということは何人かの学生が書いておりました。履修者数が多いので読みきれないというのが正直なところだったので躊躇してたんですが、教員が読むだけでなく、学生自身に書かせることの意味というのがあるなということを感じさせられました。来年度に向けての改善点も、いくつか浮かび上がってきたなと思っています。雑駁ですが、自分自身の総括としてはそんなことを考えています。

それから最後のページですが、教職課程の履修全般において、このようになれば良いという要望。これは教職入門ではなくて全体についての意見ということですので、また後半の議論の中で、これに関してご意見等あればうかがいたいなと思っています。

そして、「(6)教育制度論」はアンケートを行ったんですけども、申し訳ありません。私が教職入門の方で手一杯でして分析できていません。今日は担当の横井先生もお見えになっておりませんので、コメントもなしということで申し訳ありませんが、ここは飛ばさせてもらいます。それでは関先生、(7)・(8)の報告をお願いします。

関：教育学部の関です。私の方では、「教育の基礎的理解に関する科目」の「教育心理学」と「特別な教育的ニーズの理解」の2科目の分析を行いました。

科目の説明等、特に書いておりませんので、口頭で補足しながらいきたいと思います。教育心理学の方からいきます。教育心理学は2年生以上が取る科目になります。比較的履修者が多く、まだ完全に教職を取ると決め切っていない学生も多少取っているというような現状です。1学期、2名の教員で実施されており、前半と後半で少し内容が変わります。前半は子どもの発達について、理論も含めて話し、後半でいじめの問題とか虐待の問題とか発達障害の問題とか、実践的な話が出てくるといったような講義の構成になっております。

問いの内容は他の科目と同じになります。1つ目の「履修前にこの授業に期待していたこと」のところでは、教師として授業を行ったり子どもに関わる際に役立つ心理学的知見、ノウハウとか、あとは広く心理学を知りたいといった段階の学生も取っているので、心理学的な知識を知りたいといったような期待がありました。教職に関わる単位取得のためという回答も一定数見られます。後半のところ書いてありますけど、心理学全般の関心からというような学生も履修しているような結果が出ています。

この授業を受けて「この点がよく分かった、また身についた」というところでは、「特になし」、無回答がほとんどなくて、ほとんどの学生が何かを回答してくれています。この講義を通して何か学んだ、身についたと感じている学生が多いんだなというふうにことがうかがわれました。前半のテーマ、発達の問題と、後半のテーマ、実践的ないじめ等の問題ということがあるんですけど、主なテーマと思われる内容がそれぞれ挙がっているというところですよ。

「講義前に期待していたこと」と比べて見て

みますと、ノウハウ的な内容よりも、それをその問題をどう見ていくのかとか、どう考えるのかとか、そういったことが印象に残ったという回答が多く見られて、この辺は恐らく授業の中で担当教員が主張していた部分ではないかなと思うので、そのメッセージがよく伝わっているのではないかなと考えて、回答を出させてもらいました。

3番の「授業の内容で印象に残ったこと」は、感想の部分も、2番と重なるところがありますが、半分以上の学生が書いていることを見ると、印象に残ったこと、有意義だったことがあったんだろうとうかがわれます。やっぱり見方や考え方の部分が印象に多く残ったという記載が多いです。また、実際の例をもとにした話が分かりやすかった、面白かった、という回答が多く見られました。内容はバラバラなんですけれど、そういったところが面白かったということが多く上がっています。

次に「もっとどういうことを教わりたかったか」ですが、最初の期待の部分というか、もっと具体的な教え方とか教授法とか、教師としてどうふるまうべきとか、学生はノウハウを知りたがるというところがうかがえました。

最後、「この授業について不満に思ったことや改善すべきこと」ですが、どうもテストで評価を行われたらしくて、そのことに対する要望が多く挙がっていました。テストをやること、自体に、実施そのものについてもやめてほしいとか、逆にテストで良かったという学生も1名いました。それだけではなくて、どういうふうにするのかという実施方法、事前の説明とか実施方法がわかりにくかったという要望があり、テストするかどうかは担当教員の判断だと思いますけれども、実施方法の部分は改善の余地があるんだろうなと思いますので、担当教員の方にも伝えたいと思っています。あとは、講義の進め方そのものについては要望はあまりないんですけど、配布資料についてもう少し改善という要望が来ていました。

ここに書いてなかった補足としては、出席のことを書いている学生が少しいて、自由記述の中ほどにある点以上の出席を求めている、出席も点数に含めてほしいという回答があります。シラバスのところで出席は評価に入れないということになっているんですが、教職課程の学生、

特に真面目に教師になろうとしている学生は、出ていない学生が単位をもらえるのは納得がいかないのかなと思うんですけど、出席をちゃんと評価してほしいという話が出てくるというのが面白いというか、この科目は色んな意識の学生が取っているんで、そういう意見が出るんだなと思いました。だからどうしようということではないんですが、教職を取っている一つの学生の一つの特徴だなと思いました。

6 番目、「授業の満足度」については 8 割以上が「よかった」、どちらかといえばよかった」ということで、比較的満足度は高い授業だと思います。

教職課程全般については、先ほどと同じようなこともたくさん出てますので、この後のところで参考にしていただければと思います。

次は、「(8)特別な教育的ニーズの理解と対応」について少しお話しさせていただきます。これは 1 学期の集中科目になっていまして、夏休み期間に 3 日間集中でやって、3 人の教員がそれぞれ 1 日ずつ話すというちょっと変わったやり方をしています。履修登録者数は 204 名、実際に履修して評価の対象になったのが 185 名で、少し減っています。回答は 37 名で非常に少なかったです。これは評価の対象になった 185 名からの割合でも 20%となるので、回答が少なく、参考程度として見ていただければと思います。

1 番目の「この授業に期待していたこと」は、先ほどと似たような傾向が出ています。特別な支援を要する子どもたちの特徴や対応や支援方法などの知識を学びたいという期待、あと、具体的な事例を通して学びたいという要望が出ていました。

2 番目の「よく分かって身についたこと」については、対応や支援方法についてといった知識、期待として挙がっていたことに加えて、障害の捉え方や子ども理解の考え方を学べたというのが、学生の感想として出てきました。

3 番目の「印象に残ったこと」は、これまでと同じようなことを学べたというのがいくつか挙がった後で、ビデオとか事例とかが印象に残ったという話が多く回答として出ています。具体的に、これこれのビデオというのがずらずらっと出る形です。

4 番目、「もっとこのようなことについて教わりたかった」については、具体例が具体的な内

容をもっとという話で、具体例を通した説明が分かりやすかった、もっとそれを増やしてほしい。それがなかったから増やしてほしいということではなくて、そうやって説明されるとわかるので、もっと増やしてほしいという形での要望が多く見られました。

最後の 5 番目の不満については、かなり具体的な不満が上がってきたので、これ私も入ってるんですけど、担当教員間で少し共有して改善したいと思います。集中講義なのもあって、一方的な講義の時間がどうしても長くなっていて、3 人がそれぞれやっていて、しかも 1 単位しかないんで、どうしても詰め込みになる。1 単位で全部話そうと思うと、一方的な講義になるところが多いということもあって、そこに対する不満がありました。あとは配布資料に対する不満があったので、改善の余地があるかなと思います。

満足度については 78%が「よかった」、「どちらかといえばよかった」なんですけど、「どちらでもなかった」と答えた学生も一定数ある。20%近くあるというのは、反省点という。不満を持っている学生もあるということで、この講義について少しやり方を改善していかないといけないかなと考えているところです。以上です。最後は教職課程全般のことですので、聞いていただければと思います。終わりになります。

光本：どうもありがとうございました。報告が続きましたので、追い切れなかったこともあるかと思います。時間も限られていますので、どこからでも構いません。確認しておきたいことですか、ご質問がありましたら出していただければと思います。いかがでしょうか。

最初のシラバスチェックに関しては、今日お見えの先生方もされていますかね。取り組んでみての感想ですか、あるいは自分のシラバスに対して注文がついたとか、そういったことでも結構です。いかがでしょうか。

柳澤：先ほどの指摘を成績評価にははいけないというのは、シラバス上でそれを明記してはいけない。そういうことを授業中匂わせることはいいんじゃないでしょうか。

林：毎回の重要で、コメントシートみたいなも

のを提出してもらって、それを点数に加味するというニュアンスの書き方は多分できるので、私も授業ではそうしている部分があります。それが 2 割とか 3 割っていうように評価の点数割合に書けば、多分真面目に出ている学生からするとアンフェアだというのが少しは改善されるのかなと。

柳澤：欧米だと、クラスパーティシペーション、出席じゃなくて、能動的にクラスを良くするアクションを起こしているとか、そういうサーベイメント、小テスト等をやることで出席を取ればいいんだと。

浅川：道德教育論を担当している浅川といいます。今の出席に関わってなんですけど、今年の特徴なんですけど、出席の目安は示しているんですね。15 回授業で 12 回以上は出るように。ところが、3 回は休める権利があると理解して、ギリギリの線を攻めてきて、結果的には欠席数が上回ってしまう学生が多発した。今年は遅刻も多くて、これは特徴なのかなというような感じがした。

それと、困りごとが連続してるんですけど、グループワークが必要なのでやってるんですけど、その成果を公開して全体のグループに見れるようにするんですけど、そうすると脱力に平均化していくんですね。ダメなところに合わせていくっていう傾向が顕著です。普通だといいいところに影響を受けるんですけど、今年はその傾向が全然出なかったという特徴があると思います。

著しく二極化が上がっていったような気がして、そのことを出席でなんとか歯止めかけてるみたいな感じがしてるんです。二極化っていう傾向って、他の授業でも表われているのかなというのと、モチベーションの下がった学生にどんな対応してるのかっていうことをお聞きできるとありがたいなと思いました。

光本：ありがとうございます。アンケートの回収率がかなり低い授業もあって、それも一種の二極化の影響なのかなと思ったりもしたんですけど。二極化というのは多分どの授業でもあるかと思いますが、いかがでしょうか。

関：二極化していることを学生自身も感じてい

るみたいで、出席をちゃんと見てほしいっていう話が出るんだろうなと、コメントを読んでいて思いました。自分はちゃんとやってるからそれを評価してほしい、そうじゃない学生がいるというのを、どうも学生自身も思っている。

鈴木：理科 I・II を担当しています、理学部の鈴木です。

今、浅川先生や関先生から二極化の話がありましたが、理科 I・II についてはあまりそういう傾向はないです。オムニバスで先生が 4 人くらい担当なので、何らかの形でその授業に関するフィードバック、出席点ですね、そういうやつを出させています。ほとんどの学生は 15 回中 13 回、12 回、そういう学生が 7 割ぐらい。あと、全く出てこないのはなしで、5 回ぐらい出てきて、最終レポートでどうにかしようと思っている学生が、ほんの数パーセント。5 回以上休んだらもう諦めて最終レポートを出さないという学生が多いです。受講生は 70 から 90 くらいというふうなところなんですけど、あまり二極化というところは見られないというのが、全体的な最終の成績をまとめる時の印象です。理系と文系の違いが出てくるのかどうかわかりませんが、そういう状況です。

川瀬：アンケートにもあるんですけども、教科教育法の社会科 II を担当しています。川瀬と申します。

アンケート結果を見て、回答数の少なさに自分自身ショックを受けているところです。いくつかの要因があったんだろうと思うんですけども、毎回振り返るシートでやりとりを学生としているんです。3 行程度でいいよという小さな回答欄なんですけど、5 行・6 行きっちり書いて出してくる学生もいます。

アンケートも同様にしっかりとと思ったのですが、言い方としては「やっておいてね」という程度でした。1 月 9 日に授業をやって、共通テストの関係で 2 週空いてしまったので、1 月 30 日が最終講義でした。30 日の最終講義は何もコメントをせずアンケートをして、全体のまとめを今見たところ、わずか 4 名ということで、やっぱり念押しをかなりきちっとしないといけないんだなと反省しております。これをもって意識の低下ということではないなというふうには思

います。消化不良になるぐらい資料をバンバン渡したので、その一つとしてスルーした部分があったのかなという反省点です。

ただ、ここで回答してくれた4人ですけれども、指摘されているところの2つ、3つはなるほどこれはアンケートの効果、成果として、次年度改善したいなと思います。やっぱり消化する、考える時間ですかね。いろんな実践事例だとか、理論的なことをできるだけもう伝えたいなと。15回しかないけれども、盛りだくさんに言いたいことがあったり、やってもらいたいなというのがあるんですけど、それを130人がある一定水準以上に消化する時間、考えて自分のものにする時間を作っていきながら、何回か振り返りを重ねながら進んでいくのが必要なのかなというふうに思います。

どうしても個々の教員には領域があるので、倫理・政経、私は政経専門でずっとやっているの、そちらにシフトすることは確かにあったかなと。倫理、哲学的な、人間としての在り方、生き方をもう少し語り合うようなタイミングというか時間があつたら、もうちょっとやりたかったというふうなことがありますね。

あと、ここには表れていないですけども、模擬授業であるとか指導案だとか、これは驚くべきで、高く評価していい。学生が一生懸命作成してくれて、わずか25分程度の時間しかないんですけど、模擬授業で50分はできないので。25分の発表時間の中で、いろいろワークシートも工夫するし、教材提示など、いろんな動画を見せたり、またはグループ学習で話し合いをさせたりというようなことを工夫してくれているので、その辺はすごくよく取り組んでくれている。

後期のこの講座の前に、前期の中学の社会科の講座があつたり、後は公民ですけど、地歴の授業があつたりで、要は重層的にトレーニングされていて、実際の教科教育法、指導法とか指導案の作成、スキルというところとちょっと軽いんですけど、指導についてのとりくみは一定水準以上やれている。あとはそれを実際に教員採用試験で突破するかは別の話、担当科目とは違うところで、やっぱりトレーニングが必要だというふうに思っております。

相庭：社会科地歴担当の相庭です。5、6年前に

授業の中で授業の中でペーパーベースでやったときは提出しなかったのは2名くらいで、37名が出しました。それは手書きなんですよ。今回は2週間空けて、2回「やってね」と言ったんですけども、アンケートが減ってるのはびっくりしました。

ただ、僕もわかったらいいことって5ページなんですよ。考察もメールで送ってきたんですが。実はもう一個はやっぱり今年から5、6年前からか、おっしゃるとおり、同じように実践授業を自分とやってもらうんですが、極端に変わったのは人の授業を見なくなったんです。15回のうち6回僕が行くんです。そのうち2回は授業を見せます、見てもらいます。その時にこうだな、ああだって。残りは模擬授業を9回やってもらう。ところが授業を終わったら人の授業を見ないんですよ。なんで見ないのか。そこは二極化してると思います。

僕は高校教員ですから、実習で来た学生に対しては、自分以外の授業もたくさん見るんだよという話をします。極端に二極化してる現象は、自分に関わりがない関係ないと思っています。僕のところも半分くらいかな、教員になりたいという意識が不足していると思っています。

これが現実ですよ。これだけ倍率が下がって、教員志望者が激減して。そこをどうするかとは思っています。

自分も毎回、自分でアンケートをやっています。三十何枚ありますから、それを打ち込みしたらお見せできるんですけども、アンケートをちょっと工夫いただけると、もっともっともっと簡単なもので、時期的にもね、できるのかなと思っています。

別件なんですけど、毎年3、4人は僕の授業を受けた人が面接練習をお願いしますと言ってきます。実際に採用試験を受けるためのフォローをやっていただけますかという学生が毎年います。出口のための何かフォローアップとか、それをぜひお願いできればなと思っています。今年3人対応しました。受かった人です。是非お願いします。

光本：どうもありがとうございました。模擬授業に関しては、今年度は教育実習事前指導で教科横断的に模擬授業をやったんですね。そうしたら、かなりやった側としては手ごたえがあっ

たというか、手前味噌かもしれませんが、学生の感想にも、他の教科の模擬授業を見たのはとても良かったという感想がかなりありまして、良かったなと思っていました。しかし、今うかがったような面もあるんだなということが分かりましたので、またいろいろ考えていかなければならないなと思ったところです。

川瀬：模擬授業、おっしゃるように他の人を見ないようにするんですよ。自分なりに工夫している点は、相互評価でコメント用紙を必ず書かせるようにして、2人か3人のチーム、1人ではやらせませんので、必ずチームで話し合って授業作りをして、残りの受講生には1人1枚、A41枚のコメント用紙で、要は模擬授業の全体構成とか教材、指導案とかワークシートについてどうであったかという簡単な4つの項目を答える、あと全体のコメントを書いてもらう。声が小さいとか下ばかり見ていたという、本質的な部分とはちょっと違う、パフォーマンスの部分も含めたコメント用紙を1枚ずつ書いて、見終わったらそれを実施者には発表者に渡す。僕経由じゃなくて、そっちにダイレクトに。

そうすると学生同士なので、自分の時やりっぱなしで他の人は見ません、なんてことは実はないんですよ。だから私に提出するその毎回の振り返りシート以上に一生懸命書いてもらって、確実にその発表者に渡されて、発表者はそれを一生懸命見るわけですよ。1回ごとに2人チームでやって、そこで必死になって見て、よかった悪かったと。お互いに見る力とかコメントする力も同時にこうやりましようっていうのはテクニカルなものなんですけど、そういうシートをやらせているので、模擬授業の時は僕の話以上にちゃんとグループ学習も一生懸命参加して、生徒になった体でちゃんとやっています。

光本：ありがとうございます。今のお話は模擬授業でしたけど、浅川先生のお話の中であった、例えばグループワークなんかしても、他のグループの発表を一生懸命聞くとかかいうと、同じような問題もあるような気がします。学生相互の学びをどういうふうに作り出すかみたいな点でいうと、多くの授業に共通する問題かなというふうに気がいたしました。いかがでしょうか。

近藤：現在は担当しているのは「教育学」、いわゆる教育原理の半分になります。学生の二極化と模擬授業に少しずつお話できればと思います。

学生の二極化については、自分自身も2年生を担当しているので、後の方に悪い影響を及ぼしているのかもしれないなというふうになんと反省しています。2人で担当してるんですが、毎回の授業の出席にそれぞれ毎日にコメント出させて、それで終わりにしています。なので、ちゃんと出席すれば単位はもらえるんだけど、出席しないともらえない。ただ、ある程度内職をしていようが何していようが、出ていればそこそこの点はもらえるというふうになってしまうので、ある程度書いている人は良い成績、AだったりB+プラスだったり、そういう良い成績になるんですけど、そうでなく、内職してる人でもそこは通過できてしまうので、その点では皆さん方に悪い影響を及ぼしているかもしれないと思ひまして、お詫び方というか、そんなことしてますというところです。

自分自身の授業でも、前の方に来て、もうそんなに近くにおられるとこっちは恥ずかしいからっていう学生もいるんですけど、最初から遅刻もしてないのに、大講堂、軍艦講堂の机のないところに座って、やる気ありませんという感じの学生もいます。でも「なるべく前に来ようよ」と言うくらいで、必ず前に来なさいというふうにはしていないので、その点も自分としても指導力不足かなというふうには思います。

それから他者の模擬授業を見ることについて、なるほどなと思いました。僕自身は今、全学教育科目、1年生の教養科目ということですが、そこで「北海道大学の歴史」というのを持っていて、そこでは個人が発表する、30人くらいの発表があつて、4回の授業を使って1人5分から10分で発表する時間を持ってるんですが、その時も何年間か続けているうちに、他の人の聞いてないなというのが出てきました。

それで何をしたらかという、先ほどのお話がいいなと思ったのは、僕を介さずにするというのもいいかなと思いました。今のところ、グループを作って、そのグループの中で発表について討議する。短い時間ですけど、5分くらいかな。僕がそこに行くわけじゃないから、その時黙っていても過ぎてしまうと思うんですけど。他の人の発表を聴くような動機付けはできるかなと

思って、今年からやってみました。それがどれだけ上手くいったのかはあまり自信がないんですけど、僕も他の教職ではないところでも困っているところですよというようにことを共有できればと思いました。

今日のアンケート、シラバスチェックのコメントを聞いていて、感想としてなんですが、教職課程として結局どういう学生に受講してほしいのかというところがかなり大きいかなというふうに思います。これは両極端の考え方があると思うんですけども、教師になるつもりがない人は保険なんかとっても無駄だからやめなさいと厳しく言う。そういう考え方に立つならば、二極化の一つの山の方は負荷をかけまくってやめさせるというのもありうると思います。でも、開放制の教職課程というのはそうではないのだと思うので、ある程度は本人の判断だと思いますけど、ある程度は励ますことが重要かなと思います。

僕自身は、教師になるだけじゃなくて、教育を学ぶとか、教職に就かなくても学校教育や社会教育も含めた教育を応援できる、理論的な応援ができる、親として地域として、というようなことはよく言っています。その励ましの方をと思いました。

あと、授業評価アンケートってそれぞれの先生の目標、授業でこれを達成したいということとの関係でアンケート項目の意味があると思うので、科目ごとにアンケートの仕方は違ってもいいのかな、と思いながら聞いておりました。

浅川：先ほどの続きみたいなお話になるんですけど、教職入門から始まって、最後の教職実践演習に行くときって大体 4 割になってきますよね。だから 6 割は辞めてしまうんですよ。その最終確認というのかな、最後まで行く人と行かない人の落差がでかいってことが潜在的にあって、昔だったらグループワークしてても、グループワークの中では牽制力が働いていて、グループワークは大体真面目にやってたんですけど、最近それが働かなくなってきたんですね。だからグループワークから脱落していく。辛いから辞めるみたいにポンっと辞めていって、なんかグループで持ち合ってくれないんですよ。辞めちゃうから、他の残った人に任務が集中して悪循環が生じるという格好で不満が高まるん

です。だから、フリーライダー問題が露骨に出てくるようになった。こらえきれなくなった。元はグループがあってもなんか手伝うことないの？って感じで、そこが効かなくなってきたのはどういうことなんだろうということと、今はやめるのどれぐらいなんですか？教職入門から最後に実践演習に行くのはどれぐらいになったの？

光本：結果が出るのは 3 年後なのでなんともいえないんですが、だいたい浅川先生が言われたように、去年までは 250 人程度が受講していて、教職実践演習まで行くのが百人程度だったので、大体 4 割ってというのは変わってないと思います。今年はよくわからないんですが、なぜか教職入門の履修者が 300 人の大台に近づきまして、それは今後どうなるかわかりませんが、最終的には 4 割とかそんなところじゃないでしょうか。

浅川：厳しくするっていうのもどう考えるかですよね。最後に歩留まりが 4 割だったら、最初から 4 割にしてもいい、みたいな…

鈴木：でも先生、この理科 I もそうなんですけど、I の段階で授業を始める前のアンケートで、どのぐらい先生になるつもりがあるんですかとか、あるいはいつ教育実習に行くつもりですかと聞くと、理科 I の始まる前の 4 月の段階では半分は未定です。でも理科 II が終わって授業アンケートする時にはいつ行くんですかと聞くと、かなりの学生が「2 年後に行く」。授業を受けながら総論を聞いて各論も聞いているうちに、学生の気持ちがだんだん決まっていく。1 年生のときの 4 割だからといって捨てちゃダメだと思います。やってる間にやっぱりできそうかできないのかと逡巡しながら、行こうと思っている学生はやっぱり行かした方が…、どうでしょう？

浅川：その通りだと思うんですけど、進路がそれぞれ決まっていく過程の中で、自分はこっちを選ぶという選択だったらいいと思うんですよ。教員にしてもね。この進路を取るから教職を辞めるんだということだったら話としてはよくわかるんですけど、教職実践演習を担当した経験では、最後の段階でも免許だけを取っておくと

いう学生は、教員になろうと決めている学生に対して優越的なんですよ。露骨です。「教職にまだ就こうと思ってるんだ」みたいな感じになって態度に出てくるんですよ。教職実践者で講師の話聞いていても、もう聞かない奴は何も聞かないです。自分PCで動画を見てたりとか、お前教職に就くんだみたいなことを語るわけですね。この辺が教員になりたい人の気持ちをすごく傷つけているのを僕は随分見たので、わりと不信を持っている。

受講者の気持ちは動くし、それが自分のやりたいことを選び取る中で教職はやめましたってんだったらいいし、それで一つの授業を取ってる間にやめないんだったらそれはそれでいいと思うんですけど、途中でどんどんやめていくからすごく嫌なんですよ。授業者にとっても嫌です。グループワークしてる人はもっと嫌だと思います

上原：進路指導論を担当している上原です。3年生以上なので140人くらいです。近藤先生とのつながりでいうと、出席もしてレポートも出したのにどうして不可なんですか、だいたい20名くらい毎年落ちるんですけど、そういう質問が5名前後來ます。授業中にはそれはレポートが悪いからですよと言うんですけど、どうも聞いてないんですね。どうしたらいいか教えてください。だからレポート悪いからレポート見せて。ここがここだからこと毎回説明してるんですけど、それで困るのはですね、非常にテクニカルなんですけど、異議申し立て期間が学部によってバラバラで、いつ学生が来るのかわからないんですよ。それ何とかしてくれないかな。

一番困るのは函館なんですよ。やっぱり遠隔授業は良くないと思います。函館の方は受講態度がだんだん良くなってきて、レポートの質も上がってきてる感触はあるんですけど、やっぱり伝わってないからすごいチグハグなレポートが増えていて、こんなに真面目に出席してて真面目に書いてるのに落ちるのは忍びないなというのが結構いるんですよ。やっぱり対面で、オンラインでもいいから、函館は別にやる時間があると同じ遠隔でもちょっと違うかな。函館問題といったら函館の人に失礼ですけど、やっぱり一回聞かすことで、一粒で二度おいしいはなかなか難しいんじゃないかなという気がして

います。

光本：ありがとうございました。せっかくですので、皆様どんなことでも結構ですからご発言いただければと思います。いかがでしょうか。

採用試験を授業中に意識して何かやれることとかあれば、せっかくですので共有してもいいかなと思ったんですけど。ちなみに私の授業では毎年最初の頃に教採の問題を解かせるんですけども、学生のコメントにあるように、教採は全然大学の授業のことをわかってないのでこんな問題が出ますよと悪口ばかりです。したがって、この授業では採用試験対策は全くしませんが、でも大学でやっていることが決して無駄になるわけではない。採用試験は全く意識しませんが、こういうことが分かっていたら、採用試験だってわかるようになるんですよという言い方をしてます。

もうちょっと採用試験に関わることをやるということもあり得るし、それ以外のやり方でも何かあるいはやっていらっしゃったり、そういうのもお聞きしたいと思いました。

近藤：僕も1人だけですけど、文学部の学生から面接の練習じゃなくて、面接の想定問答に付き合ってくださいっていう、僕は想定問答で想定した答を暗記するのってあんまり良くないとは思ってるんですけど、でもそれは付き合ったことがあったので、全然顔は思い浮かばない。でも教職入門で僕の授業を受けてたからっていうので連絡してきた学生がいて、そういう需要は多分あると思うんです。相庭先生にお話が行っているということなので。

以前はキャリアセンターに教職部門があったんだけど、今なくなってますよね。教員採用試験講師の需要っていうんですかね、希望者が少ないというのも関係あるのかなと思います。そこら辺の連携を教職課程委員会とかうちの部局への要望として出たということなのかなと思いました。

川瀬：面接はやった方がいいって思うんですよ。こちらで教えていた学生が前勤めていた高校の卒業生だったので、「面接の演習をしてください」と。答える内容を求めているわけではなくて、答え方とかその時のやりとり、要は、面接官の

話をちゃんと受け止めてそれに返すという。知識を要求しているわけじゃないです。面接官は大体感じたその筋のプロなので、教えていただきたいわけじゃないんですよ、受験生に。受験生に求めるのはどう受け止めて、どういう人間性なのかというのを一瞬で測るので。だからペーパー以上に面接というのは大きな採用試験の比重なので、意欲のある学生、是非教壇に立ちたいんだと、こういう立場になって頑張りたいんだという学生がいた時には、やっぱりちょっと面倒を見る機会を何回か与えてもいいのかなと思います。かつて面接官をやったから言えること、何も練習されてないというか、もったいないなという学生が結構います。

相庭：僕もバックアップします。

浅川：何年か前は教員になりたいという願望がしっかりした学生たちが自分たちで模擬授業を交流し合ったり、サークルを作ってたんですね。それが最後には OB・OG 会を作ってたがついていったんですね。そういうところがしっかりと学生の中で、サークルとまではいなくてもつながりがあれば、そこに対して面接等を行っていくのは非常に効果的かなと。あれっってもうつながってないんですか？

光本：「つなぐ会」ですね。今も存続していて、昨年も 2 回ぐらい模擬授業交換会というのをやっています。そこに 10 人前後來ています。

浅川：今の採用試験の模擬面接の話を持ち込んでみて、そこが宣伝する格好で行けば需要側のニーズもはっきりしていて、こちら側の対応もできる。学生のつながりの中に埋め込むっていうのといいんじゃないかなと思うんです。

関：教えていただきたいんですけど、採用試験の面接というのは都道府県によって随分傾向が違ったりとか、そういうことはないんですか？

地方大学では結構やるんですけど、北大いろんなところだからどのくらいそこが有効なのかなど。それでも、それでもやっぱり多少違ってもやった方がいいだろうということですかね。

川瀬：人物評価なので、所作だとかもチェック

はします。チェックはしますけども、それは低い。なぜ、どんな教員になりたいのか、教壇に立ちたい気持ちはどの程度のものなのかというのを、圧迫面接はしませんので、自分で語らせるように答えさせるというのはやります。あと、基本的に例えば札幌で勤務したい、高校で勤務したい、なぜかっていう理由がちゃんと裏付けがある。なぜ札幌なの？なぜ高校なの？または地元のどこどこ出身のどこどこでやりたい？なぜ？というそのなぜというのがちゃんと答えられるか、自分の言葉で。途切れ途切れでもいいので、ちゃんと答えられるかどうかを問うんですね。それを複数で見ます。質問リストがあって、そこからセレクトしながら三つくらい問う。2 次試験のペーパーは当然教科共に違ってくる。面接は大体平等です。自分は札幌と北海道しか経験ないので他県はちょっとわかりませんけど

辻：今日触れられなかったんですが、教職課程がわかりやすいにくいっていうのがすごい数あって、それをどうするのかとか、それは当面とりあえずいいのかとか、いろいろこの結果をもとに今後のご相談があります。

関：わかりやすさとか、そういうところは教職課程委員会でも議論しないといけないですね。

光本：我々から見てもその通りだなと思いますね。

近藤：あと 1 限とか 5 限にまとまっているというのは全学的な事情があることだから、そこは教職課程委員会から 1 年生のガイダンスが。

光本：はい、それはもうガイダンスで必ず言っています。

近藤：わかりました。

光本：教職課程担当教員会議はこれで終わりたいと思います。長時間にわたりありがとうございました。来年度も担当いただく先生が多いと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

2025 年度 教職課程シラバス 相互点検結果報告

1. 調査の目的

- ・ 教職課程授業科目のシラバスの内容を相互点検することで、シラバスを利用する学生の観点からシラバスの記載内容が適正であるか、授業目標や、成績評価基準等が具体的かつ明確に記述されているかなどを点検し、品質の向上を図る。
- ・ 「普段はあまり見ることはない他の先生の書かれたシラバスを閲覧する」機会を得ることで、次年度のシラバス作成時にフィードバックが期待できる。

2. 調査の概要

相互点検対象講義：全講義 64 件中、開講時期が 1 学期の講義から 33 件を抽出

（次年度も相互点検を行う場合は、残りの 31 件を実施予定）

点検を行う教員：「令和 7 年度 教職課程授業科目履修者統計表」に記載されている教職課程講義のシラバス入力担当・世話教員 33 名

具体的手法：

理学部が令和 5 年に作成した「シラバス作成チェックリスト」を共有し、各担当教員による匿名相互査読形式

- (1) 1 講義あたり 2 名の査読者を（自身の講義を点検することの無いように）配置
- (2) 2025 年 12 月 10 日、教職課程講義の責任教員に一斉メールにて依頼
- (3) Google Forms にて集計（締め切り 2026 年 1 月 9 日）
<https://forms.gle/bTNkZaEfh1oQTuNq9>
回答形式：「OK（シラバス作成チェックリストとの整合性）」、または改善コメント記述方式、点検項目：8 項目
- (4) 本報告書ならびに匿名性を保った回答一覧を各担当教員と共有し、フィードバックすることで正の循環を生む。回答一覧はスプレッドシートとして下記 URL (QR コード) からダウンロード可能である。（ELMS アカウントホルダー限定）

https://docs.google.com/spreadsheets/d/1kJU3eFieiMLFCfDTx40-5U7_Jc0d10es/



3. 総合結果

回答数：53 件

項目	内容（要約）	OK 率
1	シラバス記載の基本要件充足	96.0% ◎
2	一般目標の区別・学生視点	96.2% ◎
3	一般目標の具体性	94.3% ◎
4	行動目標の区別・学生視点	96.1% ◎
5	行動目標の具体性	86.8% ○
6	到達目標と成績評価の関連	78.4% △
7	準備学習の内容・分量	84.6% ○
8	成績評価の基準と方法	82.4% ○

コメント：

◎ 「目標の区別・基本構造」は特に良好であった。「学生の視点で書かれているか」という観点も概ね適切。目標設定の形式面は定着していると評価できる。

○ 建設的なコメントが多く、本シラバスチェックを通して互いに高め合おうという意図がみられる。

△ 「評価との連動」「具体性」に課題がみられた。

4. 項目別分析

・改善傾向が見られた点

項目 5 「到達目標（行動目標）」

その授業で学生がどのような能力を身につけることが期待されているかを、「○○することができる」等の形式で、できるだけ具体的に記述されているか。

（OK 率 86.8%）

主な指摘内容：

- ・ 「理解する」「素養を深める」など外部から観察困難な動詞
- ・ 複数の目標が一文に含まれている
- ・ 具体的行動レベルへの分節化不足

課題：

行動目標の記述を「～できる」の形式にするだけでなく、観察可能・評価可能な行動に落とし込む必要がある。

項目 6 「到達目標と成績評価の関連」

両項目が、密接に関連づけて記述されているか。（OK 率 78.4%）

主な指摘内容：

- ・ 関連が明示されていない
- ・ 「総合的に評価する」のみで具体性が不足
- ・ 何をどの観点で評価するのか不明瞭

課題：

到達目標⇔評価方法の対応関係を明示すること。

ルーブリック（評価の基準を具体的に示した一覧表）や観点別評価の導入を検討。

項目 7 準備学習の記述（項目 7：OK 率 84.6%）

主な指摘内容：

- ・ 「授業中に指示する」のみの記述
- ・ 時間の目安が不明
- ・ 予習・復習の区別が曖昧

課題：

単位制度（2 単位＝90 時間）との整合

予習・復習それぞれの目安時間の明示

項目 8 「成績評価の基準と方法」（項目 8：OK 率 82.4%）

主な指摘内容：

- ・ 出席点の扱い
- ・ 評価基準の具体性不足
- ・ 到達目標との未連動

課題：

評価基準（観点）と方法を区別して記述

到達目標の全項目が評価対象になっていることを明確化

5. まとめ

本年度の相互点検結果から、以下のように総括できる。

- ・ 教職科目のシラバスの基本構造は高水準で整備されていることがわかった。
- ・ 教員間で記述様式の理解は共有されており、
- ・ 一方で「評価設計の精緻化」が今後の重点課題である。

全体として、相互点検を建設的雰囲気で行うことができた。これは点検担当教員が献身的かつ、熱意をもってくださったおかげである。

また、自由記述コメントも単なる形式チェックではなく、教育設計の質向上を志向した建設的対話になっていることが明確に確認できる。形式的整備段階は概ねクリアしており、本相互点検が単なる「点検」から「改善プロセス」へ発展していることを示している。

以上、組織的質保証を最終目的として相互点検を継続することは有意義であると結論する。
最後にご協力いただいた教員各位に感謝の意を表します。

補遺 A その他のコメント（抜粋）

- ・授業計画が 14 回しか記載されていない。
- ・外部からの観察が不可能な動詞を用いる文（「〇〇を身につける」）になっている。
- ・「考察」した結果、学生が獲得できる能力についての記載がない。
- ・「授業実践（模擬授業）を行い、教材化の能力を得る」をもう少し分節化し、具体的に書くとよいと思われる。
- ・「学びの連続性を踏まえた学習指導を作成できる」との記述は興味深い。具体的にどのようなことが求められるのかをもう少し書き込んでもらえるとよいと思われた。
- ・学習指導案自体を評価することはないのか。レポートでは何を問うのか、明示するとよいと思われた。
- ・レポートで「授業内容についての理解の深まりを問う」ことは悪くない。学生に対してどのような課題を課しているのか、可能な範囲で明示するとよいと思われる。
- ・「成績評価の基準と方法」に何を入力するのかよくわからず、方法が入力されている状況かと思います。例えば、方法と基準（観点）をクロス表にしているシラバスフォーマット等が用意されていれば、先生方も入力されるかと思います（そのような工夫がされているシラバスを他大学に多くみかけます）。
- ・「出席確認」は（実態はともあれ）記載しない方がよいかと思います。指導案作成ができたかどうかを確認する、などの到達目標と関連づけて記述すると伝わりやすくなると思う。

補遺 B その他 自由意見・コメント（抜粋）

（修正点・改善すべき点などを具体的にお聞かせください。全体を俯瞰したご意見も歓迎します。）

- ・講義の内容が具体的に伝わる良いシラバスだと思います。
- ・担当教員のこれまでの教育経験がわかりやすく示されており、やや特殊性の高い科目であっても、受講生が信頼をもって授業に臨めるように配慮がなされている。
- ・授業計画を興味深く拝見しました。それぞれの項目を何回くらい扱う予定かがわかるとより良いと思いました（指導案を作成するところに時間を割くのか否か等がわかるとこの授業の性格がよりはっきりしそうという点で）。
- ・授業計画が項目ごとに 30 回に分割されていて、しかも等分ではないので、15 回の授業ごとの計画が分かりにくい。
- ・（準備学習について）シラバスにおいても記述すべきである。ただし、形式的に欄を埋めても無意味である。この科目の事前・事後学習がどの程度求められているのか、それが可能であるのか等検討する必要がある。
- ・「出席状況、課題レポートの成績を総合的に評価する。」とあり、やや具体性に欠ける。
- ・「成績評価の基準と方法」について、各学科で定めている「成績評価基準のガイドライン」に基づいて記述されているかをご確認ください。「授業で実施するアイスブレイキング、エンカウンター、対話的活

動への参加、取り組み、及び指導案の作成・発表・修正」の記述がありますが、それぞれどの程度の評価ウェイトを占めるのか一切記載がない点に関して、所属学科でこれが認められているかが点検委員の視点ではわかりませんでした。（点検委員の所属では認められていません）もし所属学科で認められている場合はご放念ください。

・多くの日本の大学のシラバスでは、授業の目標、到達目標の項目は授業の目的、到達目標として設定されています。授業の目的は教師側が主語、到達目標は学生側が主語で、区別が明確です。シラバスの項目の見直しを提案しようと思っておりますが、どこにどうすれば進められるのかがわかりません。同様に、成績評価の基準と方法のところは、方法&（観点別）基準を別々に記載させるところが多く、その形式であれば「到達目標」と「成績評価の基準と方法」両項目が、密接に関連づけて記述されているか。」の記述をしやすいのですが、北大のシラバスではどこまで記述することが求められているのか、なかなかつかみきれないと思います。ちなみに、東大ではシラバス入力を AI がサポートする仕組みを準備中だとのことでした。

・授業計画の第 11 回～第 14 回は標記の仕方が 2 種類あるものの、文言からは区別を読み取ることはできません。2 回の授業を一括りにするなど、何らかの区分をしているのであれば、明示的に書き、1 回目と 2 回目にどのような違いがあるのかなど示すとよいのではないのでしょうか。

・授業の目標において「小・中・高等学校を通じた学びの連続性を理解する」と書かれているにもかかわらず、授業計画には高等学校の内容が明示的に示されていないことが気になる。

・「修正点」というわけではありませんが、「よくある指導案の問題点」などが示されていると「数度にわたる検討、差し戻し」がイメージしやすいのではないのでしょうか。

以上。

2025（令和 7）年 6 月 13 日

教職科目担当者 各位

教職課程専門委員会
委員長 辻 智 子

教職科目の点検・評価について

教育職員免許法施行規則の改正により、2022（令和 4）年度から教職課程を開設する各大学に教職課程の自己点検・評価をおこなうことが義務づけられました。

これに伴い、北海道大学では、全学の教職課程専門委員会に点検・評価小委員会を置き、毎年の点検・評価を実施しています。2025（令和 7）年度は、「教科教育法（社会・地理歴史）」、「教科教育法（社会・公民）」の各科目の点検・評価（アンケート調査、および調査結果の検討）をおこないたいと考えています。

つきましては、貴職の担当する教職科目に関して、点検・評価へのご協力をたまわりたく、下記の通りお願い申し上げます。

記

1. 受講者に対するアンケート調査

(1) アンケート調査の実施

1 学期開講科目：2025（令和 7）年 7 月

2 学期開講科目：2026（令和 8）年 1 月

(2) アンケート調査の結果に関する検討

アンケート調査の結果を担当教員間で共有し、意見交換をおこなう。

2. その他

(1) 調査票は、2022（令和 4）年度から用いているものを使用したいと考えております。各科目で項目の追加等のご希望がありましたら、お知らせください。

(2) 本点検・評価は、教職科目の担当教員が他の科目の担当教員と意思疎通を図り、互いの実践・経験に学ぶことを目的としています。結果の扱い方につきましても、趣旨にふさわしいものとなるよう検討します。

連絡・問い合わせ先

点検・評価の趣旨、アンケート結果の扱いに関すること

光本 滋（点検・評価小委員会委員長、教育学研究院） mitumoto@edu.hokudai.ac.jp

アンケートの内容に関すること

林 琢也（点検・評価小委員会委員、文学研究院） takhys@let.hokudai.ac.jp

2025 年度 教職科目（教科教育法）における履修者アンケートの結果報告

教職課程専門委員会 点検・評価小委員会

1. アンケートの目的

教育職員免許法施行規則の改正により、2022 年度から教職課程の自己点検・評価を実施することが義務づけられたことを受け、2025 年度は、教科教育法（社会・地理歴史／社会・公民）の講義（全 4 科目）において、受講生へのアンケート調査を実施し、教職課程の授業の現状を把握し、結果の検討をおこなう。

2. 対象科目と調査の方法

- ①前期・火 5「教科教育法（社会・公民Ⅰ）」
- ②前期・金 5「教科教育法（社会・地理歴史Ⅰ）」
- ③後期・火 5「教科教育法（社会・地理歴史Ⅱ）」
- ④後期・金 4「教科教育法（社会・公民Ⅱ）」

①～④を担当する教員に対し、2025 年 6 月にアンケートの趣旨を説明するメールを送付し、授業の中でのアンケート実施への協力を依頼した。承諾後に Google フォームのアンケートにアクセスするための URL と QR コードを送り、受講生に回答してもらう形式を採った。前期の科目は 7 月、後期の科目は 1 月に実施した。以下は、4 科目それぞれの集計結果を整理したものである。回答欄の自由記述の後ろに「括弧（）」が付されている項目は、類似内容の回答が複数あったことを示しており、数字は回答の総数を指す。このため、これらの記述内容は一部、要約・統合している。

3. アンケート結果の整理：①前期・火 5「教科教育法（社会・公民Ⅰ）」

- 責任教員：平井敦子／担当教員：大谷和大・平井敦子
- 履修者 39，アンケート回答者 25 ➡ 回答率：64.1%
- 授業の目標：中学校社会科および高等学校公民科教員として必要な指導上の知識や技能を習得するとともに、模擬授業を通して学習の成果を活かした実践的な指導力の基礎を身につける。
- 到達目標：学習指導要領をもとに、教育課程上の位置付けや目標・内容について学ぶ。そのうえで、実際の授業実践をもとに授業づくりの方法を学び、特定の単元を選択して教材研究および学習指導案を作成する。完成した指導案にしたがって模擬授業を行い、相互評価を通して、教科指導法の技能の基礎を学ぶ。社会科・公民科教育の意義と目標をふまえ、学習者理解を基礎に置いた授業設計を行う。
- 授業計画：
 - 第 1 回 ガイダンス—授業の進め方の確認
 - 第 2 回 主権者教育としての中学校社会科・高校公民科教育について
 - 第 3 回 中学校・高校を見通した公民科の教科構造
 - 第 4 回 「政治的中立性」と生徒を主体とした授業づくり
 - 第 5 回 学習者理解と授業づくり
 - 第 6～7 回 中学校公民的分野を中心に授業実践研究
 - 第 8 回 学習指導案作成について
 - 第 9～10 回 模擬授業のための学習指導案作成
 - 第 11～13 回 模擬授業
 - 第 14 回 社会科および公民科教育における今日的課題について
 - 第 15 回 前期講義のまとめと、これからの社会科・公民科教員の役割

問 1. 履修前に、この授業に期待していたことを教えてください。

- ・教科指導の方法，授業実践の仕方・組み立て方，準備の仕方（12）
- ・社会科（公民）教員を志望する上での基本的な考え方・必要なこと（5）
- ・教職の単位の取得（4）
- ・生徒との向き合い方
- ・公民という教科そのものについての理解の深まり
- ・実際の中学校に見学に行くこと，模擬授業を実施してアドバイスをいただくこと
- ・指導案の書き方
- ・なし

問 2. この授業を受けて，この点がよく分かった，また身についたということを具体的に教えてください。

- ・授業の中で何を伝えるのか，伝えようとする姿勢の大切さ，人の重要さ（7）
- ・社会科を学ぶことの意義・理念や社会科教員として持つべき意識，社会に対する向き合い方（6）
- ・主権者教育の重要性と難しさ（4）
- ・効果的な教科教育の方法，効果的な授業のポイント（3）
- ・授業内容の設計，生徒の主体的な参加を促すための方法（3）
- ・様々な角度から物事を考える観点や客観性（2）
- ・実際の中学生の授業態度
- ・生徒を第一に考えることとその難しさ
- ・なし

問 3. 授業内容で，印象に残ったことや感想を教えてください。どのようなことでも結構です。

- ・模擬選挙（投票），授業見学（5）
- ・授業に登場した用語（主権者教育，平和主義，立憲主義，政治的中立，違憲・合憲）の理解・捉え方（5）
- ・模擬授業を通じて，準備，問いかけ，生徒の興味を引くこと，生徒目線でのわかりやすさを考えること，授業する側の難しさ（4）
- ・自分がおこなった模擬授業（2）
- ・グループワークでの意見交換（2）
- ・授業準備の時間があって嬉しかった
- ・教科書以上の授業をしないと教科書の内容は身につけさせることが出来ないということ
- ・自分が受けてきた社会科の授業は必ずしも望ましいものではなかったこと，当時はそのことに全く気づいていなかったこと，そして社会科教員としては生徒がそうならないような授業を作っていかなければならないということ
- ・選挙について，まだ自分が本質的に理解していなかったと感じた。目先の印象だけでなく，政策論などしっかりと検討することの重要性を知った。
- ・凄く良い先生でした。自分が中学生の時も，この先生に教わりたかった。
- ・いろんな教え方があり，面白かった
- ・なし

問 4. もっとこのような点について教わりたかったという点があれば，具体的に教えてください。

- ・指導案の作り方や授業のコツ，授業の計画作成などの方法論的な部分（2）
- ・具体的なカリキュラム構成などの内容面について
- ・様々な意見のある社会科をどうやって教えるのか
- ・生徒との関わり方
- ・なし

問 5. この授業について不満に思ったことや改善すべきと思ったことがあれば，具体的に教えてください。

い。

➡「不満や改善点はない」との回答が4人中4人（100%）であった。

問6. この授業の満足度を5段階で教えてください。

評価	回答数	割合（%）
1. よくなかった	0	0.0
2. どちらかといえばよくなかった	0	0.0
3. どちらともいえない	3	12.0
4. どちらかといえばよかった	5	20.0
5. よかった	17	68.0
計	25	100.0

問7. 教職課程の履修全般において、「このようになれば良い」という要望があればお書きください。

- ・教育現場の実際をもっと知りたい。
- ・他の授業のコマと被らないように配慮されているのがとても有難かったので、続けてほしい。
- ・ゼミと被らない時間帯に開講してほしい（この授業は五限なので問題なかったが）。
- ・教員を増やすために教職科目の縮小をする必要は全くないと思う。それぞれが必要な科目であり、そのクオリティを下げる事は教育のクオリティを下げる事にも繋がる。コストのかからない改革ではなく、実際の教職員の業務の整理や賃金上昇など、本質的で教育のクオリティを落とさない改革を正面から行うべき。
- ・（この場を借りて）日程や場所等の連絡が何処に書いてあるか分からない時がありました。（特に集中講義）教職用の moodle チャンネルを作ったら良いと思います。
- ・卒業単位に入れてください。
- ・教職のための授業がなくなればいい。
- ・地理学、歴史学といった座学の教職の必修単位はオンデマンドで受講できるようにしてほしい。そうすれば学部の特典的履修と両立できるので。教科教育法など対面じゃないといけないものはしょうがないが。
- ・特に無し。

<考察>

全体の9割近くの回答者が「よかった」、「どちらかといえばよかった」を選択しており、満足度の高い講義であることがわかる。また、アンケートからは、多様な価値観や考え方の中で授業では何を伝えるのか、伝えようとする教員の姿勢の重要性といった、社会科の教員としてのあるべき姿や意識、社会に対する向き合い方など、単に知識を教える（覚える）だけにとどまらない、社会科教育の本質的な部分を考え、理解させるような授業が行われていることが推察できる。指導案の作り方や授業のコツ、授業計画の作成といった方法論的な部分をもっと学びたかったという回答が一部にあるが、15回の授業構成で全てを学び、習得することは難しく、回答者の指摘は、「強いて言えば」という程度のもののようにも感じられる。この点は、「不満や改善点はない」という回答が物語っている。

4. アンケート結果の整理：②前期・金5「教科教育法（社会・地理歴史Ⅰ）」

○責任教員：相庭達也／担当教員：川口暁弘・相庭達也

○履修者：45人、アンケート回答者：17人 ➡ 回答率：37.8%

○授業の目標：中学校及び高等学校における授業指導案が作成でき、授業実践力を身につけ、教育実習に備える。

○到達目標：授業実践上の様々な方法論や教材について理解し、指導案を作成し模擬授業を行うことで授業力の基礎を身につけ、教育実習を行うことができる。

○授業計画：

- 第1回 中学校や高等学校において「地理」「歴史」を学ぶ意義について
- 第2回 新学習指導要領について
- 第3回 内容について
- 第4回 教材について
- 第5回 展開について
- 第6・7回 技術について（含 電子機器を使用した授業）
- 第8回 指導案作成に向けて
- 第9～15回 グループ別模擬授業実践

問1. 履修前に、この授業に期待していたことを教えてください。

- ・授業を面白くする工夫（スキル・テクニック、考え方）や意識していることの習得（5）
- ・地歴の指導方法、授業の作り方（5）
- ・伝え方・地歴科目を担当する教員の心構え、気を付けること（5）
- ・教職単位の取得（1）
- ・高校生に対する授業の難易度、準備にかかる時間を実感すること

問2. この授業を受けて、この点がよく分かった、また身についたということを具体的に教えてください。

- ・授業の組み立て方、工夫・配慮、準備作業の重要性、（7）
- ・生徒一人ひとりを尊重することの大切さ、そのための振る舞い方（4）
- ・生徒主体の授業をつくるための声かけやフォロー、板書、ワークシート作り、大切にすべきこと（3）
- ・人にいかにして物事を伝えるかということ
- ・先生という職業の責任の重さ

問3. 授業内容で、印象に残ったことや感想を教えてください。どのようなことでも結構です。

- ・生徒をリスペクトする姿勢、生徒が主体的に参加するための方法、先生のつくり出す空気感（7）
- ・「教える」のではなく「伝える」ということ、生徒に「共感」してもらえるような授業を行うこと（2）
- ・相庭先生の授業の進め方や話の面白さ（学生の集中力が切れないような展開）を見習いたい（2）
- ・模擬授業（2）
- ・手を動かして書く時間と話し合ったり考えたりする時間のバランスをどう取るかが大事だと思った。
- ・日清戦争についての日本と中国の記述を比較したこと。日本の教科書が日本帝国主義が侵略戦争を遂行したことを曖昧にしていることに気付かされた。
- ・確実に授業が進化していること。穴埋めの答えを書いていたり、グループワークを工夫したり、眠らせないように喋り方や資料に工夫を凝らすなど。
- ・相庭先生の授業のコツは何十年にも渡る経験から身についたものだと思われるが、それが素人の我々が使っても有効的であったこと。

問4. もっとこのような点について教わりたかったという点があれば、具体的に教えてください。

- ・特に無し（2）
- ・自分の専攻ではない授業内容の勉強の仕方
- ・地理歴史の知識が教師にない時（専門外）はどうするのか、時間がない中、どう1年間の授業日程を組むのか

問5. この授業について不満に思ったことや改善すべきと思ったことがあれば、具体的に教えてください。

- ・特に無し（4）

- ・グループではなく個人で授業がしたかった
- ・5限であること、感想を書き切る時間がない

問 6. この授業の満足度を5段階で教えてください。

評価	回答数	割合 (%)
1. よくなかった	0	0.0
2. どちらかといえばよくなかった	0	0.0
3. どちらともいえない	0	0.0
4. どちらかといえばよかった	3	17.6
5. よかった	14	82.4
計	17	100.0

問 7. 教職課程の履修全般において、「このようになれば良い」という要望があればお書きください。

- ・教職科目と学部・研究室の必修（必須の）科目の授業時間帯の重複についての改善依頼（3）
- ・卒業要件の単位に教職科目が含まれるようになって欲しい（2）
- ・長期休みのときなどに、授業の練習会があったら参加してみたいです
- ・2.3.4 限にしてほしい
- ・教育学がもう少し楽しければな、、、

<考察>

全体の 80%以上が「よかった」と回答しており、「どちらかといえばよかった」を含めると回答者全員（100%）に達しており、受講生が高い満足度を感じていることがわかる。特に教員側が生徒を尊重する姿勢や主体的に授業に参加してもらうための工夫や共感を生み出すことが授業の質の向上にもつながることを回答者が感得している点は、講義担当者の毎週の授業の進め方を学生が俯瞰して捉え、自分が授業をする場合に置き換えて理解できており、特筆すべき点といえる。また、グループではなく個人で（模擬）授業がしたかったという点などは、受講人数や授業回数などとの兼ね合いもあるため、対応することは難しい面もあるといえる。

また、アンケート回収後に、授業担当の先生から頂いたメールのコメントを参照すると、出席率が高く、意欲的な受講生が（おそらく）アンケートに回答（協力）してくれているため、そうではない学生との二極化が進んでいる点が気になりとのことであった。この点、出席率や授業への意欲が必ずしも高いとはいえない学生の声や評価も把握できれば、場合によっては、その意見も参考にして、さらに授業内容の改良や受講生全体の主体性を高めることに寄与できる可能性もあるため、点検・評価小委員会におけるアンケートの仕方（方法）や内容（項目・聞き方）を再検討することも今後の課題といえる。

5. アンケート結果の整理：③後期・火 5「教科教育法（社会・地理歴史Ⅱ）」

○責任教員：平井敦子／担当教員：光本 滋・平井敦子

○履修者：30 人，アンケート回答者：1 人 ➡ 回答率：3.3%

（履修者に対して、回答者数が非常に少なく、参考意見として理解するのが適当）

○授業の目標：中学校社会科および高等学校地理・歴史科教員として必要な指導上の知識や技能を習得するとともに、模擬授業を通して学習の成果を活かした実践的な指導力の基礎を身につける。

○到達目標：学習指導要領をもとに、教育課程上の位置付けや目標・内容について学ぶ。そのうえで、実際の授業実践をもとに授業づくりの方法を学び、特定の単元を選択して教材研究および学習指導案を作成する。完成した指導案にしたがって模擬授業を行い、相互評価を通して、教科指導法の技能の基礎を学ぶ。社会科・地歴科教育の意義と目標をふまえ、学習者理解を基礎に置いた授業設計を行う。

○授業計画：

第1回 ガイダンスー授業の進め方の確認

- 第2回 戦後「社会科」創設の意義と歴史的背景及び今日の課題
- 第3回 学習指導要領をふまえた教科書研究と授業づくり
- 第4回 学習者理解と授業づくり
- 第5回 中学校地理的分野を中心に授業実践研究
- 第6・7回 中学校歴史的分野を中心に授業実践研究
- 第8回 学習指導案作成について
- 第9～10回 模擬授業のための学習指導案作成
- 第11～13回 模擬授業
- 第14回 社会科および地歴科教育における地域的課題について
- 第15回 後期講義のまとめと、これからの社会科・地歴科教師の役割

問 1. 履修前に、この授業に期待していたことを教えてください。

➡「特段なし」

問 2. この授業を受けて、この点がよく分かった、また身についたということを具体的に教えてください。

➡「歴史認識」

問 3. 授業内容で、印象に残ったことや感想を教えてください。どのようなことでも結構です。

➡「歴史認識の仕方がとても興味深い授業だった」

問 4. もっとこのような点について教わりたかったという点があれば、具体的に教えてください。

➡「回答なし」

問 5. この授業について不満に思ったことや改善すべきと思ったことがあれば、具体的に教えてください。

➡「特になし」

問 6. この授業の満足度を5段階で教えてください。

評価	回答数	割合（％）
1. よくなかった	0	0.0
2. どちらかといえばよくなかった	0	0.0
3. どちらともいえない	0	0.0
4. どちらかといえばよかった	0	0.0
5. よかった	1	100.0
計	1	100.0

問 7. 教職課程の履修全般において、「このようになれば良い」という要望があればお書きください。

➡「回答なし」

<考察>

社会科（地理歴史）ということもあり、歴史認識や歴史観について、受講生に色々と考えさせるような内容や場面のある授業であったことが推察される。不満・改善点はなく、回答者にとって、満足度の高い授業内容であったといえる。他方、回答者が1人という点は、満足度の高い受講生の中でも、限られた学生の声拾ったに過ぎず、他の出席率の高い学生や意欲的な学生、さらには、興味・関心や出席率の低い学生の意見を十分に反映（把握）できるよう、アンケート実施の方法も含めて検討が必要であ

る。

6. アンケート結果の整理：④後期・金4「教科教育法（社会・公民Ⅱ）」

○責任教員：川瀬雅之／担当教員：横路俊一・川瀬雅之

○履修者：35人，アンケート回答者4人 ➡ 回答率：11.4%

（履修者に対して，回答者数が非常に少なく，参考意見として理解するのが適当）

○授業の目標：中学校社会科、高等学校公民科教員としての、必要な学習指導上の知識及び方法論を習得し、学習指導案作成、模擬授業を通して実践的な教科指導力を身に付けることができる。

○到達目標：教材研究、指導案作成、模擬授業を通して、生徒の実態に応じた効果的で実践的な授業力を習得し、「現実社会の諸課題」を教材化し、ICTの活用も含めた「授業」をデザインして、教科指導することができる。

○授業計画：

第1回 中学校・高等学校の学習指導要領における公民科の教科・科目の位置づけと関連性，教科構造及びその特色の理解

第2回 中学校・高等学校の社会科・公民科を取り巻く教育課題と教師の役割の理解，並びに公民科教育の目指す方向性の認識

第3回 「授業づくり」の実際，事例研究による教材研究，指導案作成，授業展開，評価等の理解

第4回 特別支援教育の知見に学ぶ学習指導に関連する知識及び方法論の理解，「授業デザイン（設計）」に向けた取組

第5回 ICTの活用について，その具体的な方法論と課題の理解，「授業デザイン（設計）」の工夫

第6回 模擬授業に向けた学習指導案作成のための教材研究の進め方，指導案作成の方法及び評価の観点（評価規準）の理解，指導案作成準備

第7～8回 担当単元の学習指導案作成

第9～14回 模擬授業及び相互評価，検討

第15回 公民科教育の目指すものについての研究協議（講義全般のまとめ）

問1. 履修前に，この授業に期待していたことを教えてください。

- ・模擬授業の実践と意見交換
- ・公民科の教育法を身に付ける
- ・社会にある様々な問題を，いかに社会科教員の視点から伝えられるのか
- ・教育実習に行くにあたって公共の指導法を学ぶこと。

問2. この授業を受けて，この点がよく分かった，また身についたということを具体的に教えてください。

- ・メタ認知、「身近な教材」とは、グループワークの工夫
- ・公民科教員としての基礎知識についてよく身についた。
- ・教職現場での実情、様々な視点で働かれている先生がいることがわかった
- ・具体的な指導法(教材の使い方、問の立て方、目標と評価の作り方など)

問3. 授業内容で，印象に残ったことや感想を教えてください。どのようなことでも結構です。

- ・OPPAシート，有朋高校の事例，他の人の模擬授業での授業構成の工夫（特にグループワーク）
- ・模擬授業
- ・高校入試を解いてから授業を構想するというのが，あまり普段の講義などでは取り上げられてこなかったやり方だな，と感じた。
- ・遠隔授業センターの取り組み

問4. もっとこのような点について教わりたかったという点があれば，具体的に教えてください。➡「倫

問 5. この授業について不満に思ったことや改善すべきと思ったことがあれば、具体的に教えてください。

- ・資料はたくさん配っていただいたがそれを消化する時間がなかった。
- ・社会科は暗記ではないとは仰られていたが、入試を各所で意識した授業であったように思う。それ自体が必ずしも悪いとは思わないが、どのような問題意識を持って教育を考えているのか自覚的に考えている学習者がどこまでいるかは怪しいと思う。また技術面寄りではあったが、いかに社会の諸問題をとらえ、授業構想をするのかに自覚的であるのか大切であるように思うが、それを考える機会は他の授業と比較しても非常に少なく感じ、残念だった。

問 6. この授業の満足度を 5 段階で教えてください。

評価	回答数	割合 (%)
1. よくなかった	0	0.0
2. どちらかといえばよくなかった	1	25.0
3. どちらともいえない	0	0.0
4. どちらかといえばよかった	1	25.0
5. よかった	2	50.0
計	4	100.0

問 7. 教職課程の履修全般において、「このようになれば良い」という要望があればお書きください。

- ・実践事例紹介（理論にとどまる場合あり）
- ・制度として、履修科目が安定できるように整っていると、それぞれの教職をとりたい学生のニーズにも応えつつ履修に苦勞する方々が減るように感じることはあります（もちろん制度の維持が困難なことは承知なのですが…）

<考察>

回答者が 4 人のため、全体の傾向とはいえないが、平均 4.0 点と、おおむね満足度の高い結果となっている。ただし、「2. どちらかといえばよくなかった」を選択する回答も存在するため、受講者によって評価の分かれる部分もあったことがうかがえる。ただし、あくまで回答者 4 人中の割合（25.0%）に過ぎない。

グループワークの工夫や公民を教える上での基礎知識や現場の実態、教員の視点や指導の方法について回答者は理解を深めたことがわかる。また、公民分野の中で扱うべき学習内容が広範なこともあるが、もっとこのような点を教わりたかったという設問への回答として「倫理の指導法」が挙げられていた。ただし、この点は講義回数も限られるため、公民分野に徹底する汎用性のある指導の方法や視点を学習者がコツとしてつかめるような意識付けを図ることで、扱う内容が異なっても、その料理の仕方（教え方や伝え方の工夫や示し方）は、ある程度、習得できると考える。この点は、充実した配布資料を消化する時間がなかったという回答や、いかに社会の諸問題をとらえ、授業構想をするのかを考える機会が他の授業よりも少なく感じたという回答なども含め、個々の学生の問題（努力や工夫次第）なのか、それとも講義において改善の余地があることなのかは、回答者数が極端に少ないこともあり、判断することは難しいといえる。

7. まとめ（全体を通して）

今年度、アンケートに協力して頂いた 4 科目とも、受講生の評価や反応は総じて良く、授業自体の満足度やそこから得られる知識や視点（見方・考え方）は、社会科（地理歴史・公民）教員としての資質や能力を高めるための意識や動機付け、教職課程を修める上で必要な内容を十分に扱っているものと判

断できる。このため、ここで培った知識や経験を整理・融合し、教育実習に向かうための繋ぎの部分に対するフォローを手厚くする機会を充実させることも本学の教員養成体制の整備においては重要と考える。

2025 年度 教職科目(教職入門) における履修者アンケートの結果報告

2 単位 2 学期・火 1・火 5 光本 滋

1. 科目の位置づけ・内容

- 教育職員免許法施行規則上の位置づけは「教育の基礎的理解に関する科目」。「教職の意義及び教員の役割・職務内容（チーム学校運営への対応を含む。）」を「含めることが必要」とされる。
- 多くの学生にとって最初の教職科目であることから、学生が自身の経験を通して抱えてきた教師像を崩し、教職に関して他面的に理解することをめざしている。
- そのために、(1)教師論（社会的イメージ、教師に関する研究）、(2)教職の専門性に関する思想・規範（ILO・UNESCO「教員の地位に関する勧告」1966 年）の意義と、その形成において教師の教育実践が果たして役割の重要性、(3)教職の現代的課題（教師が直面する諸問題、教師の権利、教師が職責を果たすことのできる社会的条件）等のテーマを扱っている。
- 上記の理解を深めるためにゲストスピーカーの講義を取り入れている。2025 年度は以下 4 名の現職教員にお話いただいた（勝亦あき子（東京大学教育学部附属中等教育学校・教諭（国語））、三田村祐二（北海道白樺高等養護学校・教諭）、米家直子（北海道幕別清陵高等学校・教諭（公民））、森田悟史（島根県立隠岐島前高等学校・講師（数学））。
- 2026 年 1 月 20 日は、北海道教育委員会教職員課による出前講座「北海道の先生になろう」をおこなった。

2. アンケート結果

- アンケートは 2026 年 1 月 27 日（火）の授業時間に実施。回答数/履修者数は、1 限：45/154（29.2%）、86/141（61.0%）。
- アンケート結果は、肯定的であるのみならず教員の意図を評価したものが多かった。このことは嬉しいが、回答数が受講者の約半数であることから、回答が肯定的に捉えている者に偏っている可能性はある。
- 2025 年度は、ゲストスピーカー講義の流れが非常によかった。勤務校や地域が例年以上に多様であった。最後の森田さんの異色の経歴（SE→JICA 研修・事務職員（この間に通信制で教員免許取得）→高校教員→専業主婦→高校教員）は、受講者の教師についての固定観念を崩すとともに、職業生活を通して追求すべきものを考えるきっかけになったようである。
- ChatGPT による分析では、「より実践的・キャリア直結型内容へのニーズ」が見えるとのことだが、そうだとすると、単にこれらを多く提供すればよいというわけではないだろう。教職課程を「大学における教員養成」にふさわしいものとするという観点から、入門科目の内容を検討していきたい。
- アンケート結果からの抜粋

この点がよく分かった、また身についたということ

- 教師像というものが歴史的にどのような変遷を経て形作られてきたのかということや、教師が現在抱えている問題についての理解が深まりました。
- 様々な先生方のお話を聞いたことが良かった。ただ教える以外の、生徒・保護者との関係や教員間の関係の在り方などの視点を身に付けられたと感じている。
- 教育における教師の役割や責任、学習者への関わり方について理解が深まりました。特に、理論と実践を結びつけて考える視点が身につく、教育現場を多角的に捉えられるようになったと感じています。
- 自分の教師に対する見方が一新された。啓蒙を行う存在ではなく、対話する存在であることが強く意識されるようになった。

- 実際に教育委員会の方に来ていただけたこと、そのほかの様々な生き方をしている教員の方々の話を聞くことができたことにより、教員という職業を選んだとしても自分の生きる道は多くあるということ、教員というひとづくりの中にも多くの生き方があるということを知ることができた。これらの点はとても興味深かった。
- 複数の特別講義を経て、理論ではなく実地経験に基づく教員の姿を具体的に知ることができた。他の多くの教職科目で扱われた制度や理念が現場ではうまく機能していないことも理解できた。
- 教師という職業を、専門性から、人間的な側面から知見を深めることができたことに加え、行政との関わりや教育と成長のあり方を探求することができた。
- 様々なゲストの方がお話をさせていただいて考え方や意見も様々だったが、現状の良い部分も悪い部分もそのまま伝えてくださって「教師」という職業に対する解像度がとても上がった。教師という職業を良くも悪くも固く考えていたが、自分の考えを大切にしながら自由にやっていいんだという発見や自分の生活も大切にしながら続けていこうという方があるんだという気づきを得たことで考えが柔軟になった。

授業内容で、印象に残ったことや感想

- どのような知識が求められるか漠然と知ることができたので、教員採用試験の問題を実際に解いたことが印象に残った。
- 大石久子が示した子供たちのための新しい教師像。
- UNESCO が定めている専門職としての教職の理念が、大変興味深かった。
- 外部講師の方で、お名前を忘れてしまったのですが、「教師とは、人間の存在というものについて考え続ける仕事」みたいなことをおっしゃっていたのが記憶に残っています。私は、つい癖で哲学的なことを考えこんでしまったりするので、もしかしたら教師が向いているのでは？と感じることができました。
- 教師になるのは卒業してすぐではなくて、一般企業に就職したり海外へ行ってみたいなど様々な経験をしてからでも遅くはないわかったことが印象的でした。私は卒業後すぐに教師にはなりたくないと思っているものの、教師という職業が選択肢の1つにはあるので、実際にそんな人がいると知れたことが教職に前向きに取り組もうという気持ちを抱かせてくれる一因になったと思う。
- 教育委員会による説明が、教職課程や教育現場の実態をおよそ踏まえていない内容であったことは気になった。
- 道教〔委〕の方の話が聞けたことが良かった。道内での遠距離転勤はしたくないので、高校教員になるなら私立か道外にしようと思った。
- 最後の授業が一番印象に残った。これからの教職のありかたについて、転換期にいる私たちがができることも模索したいと考えるようになった。
- （授業内容ではないかもしれないが）期末課題を通して、現職の教員の方にインタビューをしたのが自分にとってとてもいい経験になった。講義を通してだけではわからない、その人の人柄やこれまでの人生なども知ることができ教員を目指す上での悩みなども聞いてもらえたのでモチベーションが大変あがりました。
- 期末レポートについて、「教師の研修会」に参加し学んだことを書きなさいというテーマであったが、このテーマが周知されたときは失礼ながら「知り合いの先生も地元だし、実際の研修会に参加するのもハードルが高いしで、やる気が出ない課題だな」と思ってしまった。しかし先日実際に研修会に参加してみると、「研修会」というもののイメージが180度変わり、内容もすごく興味深いもので参加してよかったと思った。
- 部活をなくした町、という動画が印象に残った。部活は学校内で完結するものということが私の常識であり、地域チームというものは異質な存在であった。ゆえにわざと地域チームにして力を集結させ、強くするというものは目から鱗だった。
- 光本先生が毎回の授業で批判的思考を大切にされていて、とても面白かったしためになった。また、ゲストスピーカーの方々もそれぞれ意見をはっきりと持ってらっしゃる方が多くて、意見は必ずしも一致しないけれどぶれない軸を持っているのが素敵だと感じた。昔の時代の映画を見たり、法律の条文を読んだり教育は様々なアプローチが可能でとてもおもしろいと思った。とても教職に対して興味と期待をもつことができる授業でした。ありがとうございました。

不満に思ったことや改善すべきと思ったこと

- 周りの人と話すだけでなく、自分の考えをワークシートに書く時間があれば、あとで見返したときに役立つと思った。
- 一方通行型の授業が多い気がした。生徒同士の意見交流を増やすと、より考えさせる濃厚な授業にできるのではないかな。
- 負荷の大きい教職課程を受講しようとしている1年次の学生たちに対し、「教職課程をあきらめる」

ことを選択するための情報提供が不十分であったように感じる。2 年次まで教職課程を履修した感想としては、内容・制度ともに北大の教職課程の質は低く、履修負担は極めて大きい。教職課程に期待していたような内容は学ぶことができず、モチベーションも上がらないものの、バイトやサークル活動などに充てる時間を大きく削ってまで履修を進めてしまった以上はもはや損切もしがたく、新たに教職課程を受講しようとしている学生たちには正直お勧めできない。教職入門では制度上履修に困難が伴うことは再三伝えられたが、1 年次の学生にとって実感を伴うような判断材料としては不十分だと感じる。

- 教員になるに当たっての心構えについて学んだり、教員採用試験に向けての導入として、学習指導要領の総則についての解説などを教わりたかった。
- 時間内に授業を終わらせていただきたいです。また、スライドの文字がかなり多くて、集中できないなとも感じました。先生の講義は内容は面白いのですが、現代の教育に批判的すぎて、聞いていて少しつらくなることがありましたので、多少控えめにしていただけるとありがたいと思います。

ChatGPT による分析

1 限

1. 全体傾向（満足度）

■ 満足度分布

- 5. よかった：15 名（33.3%）
- 4. どちらかといえばよかった：23 名（51.1%）
- 3. どちらともいえない：7 名（15.6%）
- 1・2（否定的評価）：0 名

2. 履修前の期待

多くの学生が以下を期待していました：

- 教職課程の仕組みの理解
- 教職とはどのような仕事かの理解
- 教員の実情（働き方・課題）
- 教員が抱える問題と対処法

→ 制度理解＋現場のリアルを知りたいというニーズが中心でした。

3. 授業を通して得られた学び

自由記述から見える主な成果は：

① 教員の実像理解

- 現職教員の働き方
- 現場の課題や実情
- やりがいや責任

② 教員としての心構え・倫理観

- 制度設計や教職の意義
- 教員としての姿勢

③ 進路意識の変化

- 「教員という道も悪くない」
- 「履修を続ける決心がついた」

→ 単なる制度説明にとどまらず、職業観形成に影響を与えている点が大きな成果です。

4. 特に印象に残った点

キーワード出現数からも明確ですが、

- 「ゲストスピーカー」関連言及：22 件
- 「教員」関連言及：52 件

とくに

■ 現職教員の話

■ ゲストスピーカー回

■ インタビュー課題

が強く印象に残っていることが分かります。

→ 理論よりも「現場の声」が強い教育効果を持っていることが明確です。

5. 改善点・要望

大きな不満はほぼありませんが、以下のような意見が見られます。

① 採用試験対策をもっとしてほしい

- 教員採用試験に関する具体的指導
- 実践的支援の充実

② 課題の出し方

- 毎週課題があった方がよい
- 継続的なアウトプット機会

③ より具体的な実務面

- 転勤
- 現場のリアルな制度

→ 授業満足度は高いものの、より実践的・キャリア直結型内容へのニーズが見えます。

6. 総合的な分析

この授業の特徴は：

- ✓ 制度理解＋職業観形成
- ✓ 現職教員のリアルな声
- ✓ 学生の動機づけ向上

特に、

- 教職への前向きな態度形成
- 教職課程継続への決心

が生まれている点は、授業の大きな成果です。

5 限

1. 全体満足度の傾向

■ 満足度分布

- 5 (よかった) : 約 3 割
- 4 (どちらかといえばよかった) : 約 5 割
- 3 (どちらともいえない) : 約 2 割
- 1・2 (否定的) : ほぼなし

■ 評価

肯定的評価 (4・5) が約 8 割以上を占め、全体として高い満足度です。

明確な不満層がほぼ存在しない点は非常に安定した授業運営を示しています。

2. 履修前の期待

自由記述から読み取れる主な期待：

① 教職課程の仕組み理解

- 教職課程の流れ
- 単位取得の制度
- 教員免許の取得方法

② 教員の実情理解

- 教員の仕事の内容
- 現場のリアル
- 働き方や課題

→ 「制度理解」と「現場理解」が主軸でした。

3. 授業を通して得られた学び

回答内容を整理すると、以下の 4 テーマに分かれます。

① 教員の実態理解

- 現職教員の話が具体的でよかった
- 現場の大変さややりがいを理解できた
- 働き方のリアルを知れた

→ 特にゲストスピーカーの効果が大きい。

② 教職への意識変化

- 教員も選択肢として考えたい
- 教職課程を続ける決意ができた
- 教員の責任の重さを理解した

→ 職業観形成に影響。

③ 制度理解の深化

- 教職課程の仕組みが分かった
- 教員免許取得までの流れが明確になった

→ 履修前の期待に込めている。

④ 実務的ニーズの顕在化

- 採用試験対策をもっと知りたい
- 実際の準備について詳しく聞きたい

→ 理解段階から「具体的準備」段階へ関心が進んでいる。

4. 印象に残った内容

特に多く言及されたのは：

- ゲストスピーカー回
- 現職教員の体験談
- インタビュー課題

→ 理論講義よりも「生の声」が強く記憶に残っている。

これは教育効果として重要なポイントです。

5. 改善点・要望

大きな批判はほぼなし。ただし：

◎ 採用試験対策の強化

- 試験内容
- 勉強方法
- 合格体験談

◎ 実務的内容の充実

- 異動・転勤
- 労働環境
- 学校の課題

◎ 課題設計

- 毎週振り返りがあってもよい
- もう少しディスカッションを増やしたい

→ 「不満」というより「さらに具体化してほしい」という要望。

6. 構造的分析 (授業の機能)

この授業は以下の三段階構造になっています。

① 教職とは何かを知る

② 現場のリアルを知る

③ 自分の進路として考え始める

入門科目として理想的な流れです。

7. 総合評価

このアンケートから読み取れる授業の特徴：

- ✓ 高い安定満足度
 - ✓ 現場接触型授業が強い効果
 - ✓ 職業意識の形成に寄与
 - ✓ 次段階 (試験対策) へのニーズ発生
- つまり、「教職理解」から「教職志向形成」へ進ませる授業」として機能しています。

教職課程の履修全般において、「このようになれば良い」という要望

- 少々煩雑に思える手続きがわかりやすくなるか、そのものが簡略化されると良いと感じた。
- 保険の見積もりのような、教職課程のどの単位を取れば要件を満たすかが分かるサイトなどを作成してほしい。
- もっと情報提供をしてほしいです。1年生のときにどれを取ればよいのかだけでなく、今後の見通し、教職免許を取る人だけでグループを作って招待していただいても良いと思います。北大は2年生からは1年生のときと違う人と絡むことが多い大学です。その点をしっかりと理解して、学生の不安をできるだけ軽減していただきたいと強く思います。
- 教職課程の履修の道筋が非常にわかりにくいことも改善してほしい。当然のように必須科目との時間割重複があるため、実質的に何年生までにどの科目をとるべきかという点が非常に複雑である。「何年生以上でない」と履修できないという制限も、内容を鑑みて合理的であるとは言えず、1年次から多くの教職科目を計画的に履修を進められるようにすることも学部進学以降の負担を少しでも軽減することに寄与するのではないかと考える。
- 学校や学科、コースのホームページや便覧等に教職免許取得が可能であるとの記載があるにも関わらず、学部学科必須科目と時間割が重複し物理的に履修が不可能である場合が複数あり、迅速な改善を求めたい。また、時間割の重複等による履修困難の解決の一切を、教務等が適切な対応をとらず、学生に一任している点も職務怠慢と評価せざるを得ない。せめて責任の所在を明らかにしてほしい。オンデマンドも解禁してほしい。
- わかりにくいため、わかりやすくまとめた冊子のようなものがあればいいと思います
- 私は水産学部だが、札幌でしっかり単位を取りきらないといけないことや函館で集中講義として教職課程を学ぶ必要があることが大変で、なかなか専門科目や自分の生活と両立できる人は少ないと思う。しかし、水産学部は日本でも少ない学部で、研究内容も珍しいため、そういった学部から教師を輩出することは必要だと思う。なので、もう少し少ない負担で教員資格が取れるといいと思う。
- オンラインで済む内容だけの回はオンラインでも受講できるようになったら良いです。1限か5限という空コマができやすい時間しかないので、それで受講を憚る人もいるかもしれません。
- オンデマンド受講を可能にしてほしい。学部・学科の通常科目に加えて履修するため、教職科目の履修はそれらを圧迫している現状にある。また、時間割の重複を避けて1限や5限に設定されていることが多い。これらによって、特に登下校に1.5時間以上かかる学生にとってはサークル活動やアルバイト、ボランティア活動といった勉学以外の学生生活の充実が困難となっており、教職を受けるモチベーションの低下を招いている。試験やレポートで習得度を評価することはできるのだから、履修の上での時間的拘束を緩和するなどして、融通が利くようにしてほしい。
- 教育実習を前提とした履修を可能としてほしい。具体的には、「教育実習を行うための条件科目」を撤廃してほしい。教育実習を経なければ免許状を取得できないが、教育実習を行うには多くの場合前年度に先方への内諾が必要となる。しかしながら、前述のとおり必須科目との時間割重複や年度制限があり、また時間割も年度によって変更されるうるため、前年度の内諾依頼時点で「教育実習を行うための条件科目」を履修できる保証がない。教務課に相談したところ「大学院に進学すればよい」といった助言をされたが、大学院に進学することを前提とした設計は不合理であるし、そのような意図での制度設計なのであれば事前に説明が欲しい。
- 来年以降は1, 5限が多いと聞いたので、もう少し極端でない時間割の配置になったら履修しやすくなると思っています。
- 学校訪問などの実践があればいいと思った。
- 教員になるために必要な知識なのかわからないものが多い。具体的には制度設計や理論を多く教わるが、それよりも生徒とのかかわり方や授業の実際の様子、教師の具体的な一日などを知りたいと感じている。
- 授業内容の精査と体系化による必要次数の削減をしてほしい。複数の教職科目で内容が大幅に重複したり、教員になるうえでおよそ必要ないであろう知識(教員の専門分野の解説等)に偏重した授業があったりと、「教職科目」として全体を俯瞰できていないと感じる場面が非常に多い。
- 授業方法や指導内容等について、最低限の質を保証してほしい。(担当教員が)教育として相応しいとは言い難い水準の授業を行うものや、他の教職科目との内容の重複が著しいために意義を感じられないものなど、ただでさえ負担の大きい教職科目において「余計」ともいえる負担の増加に寄与している部分は見直しが必要と考える。
- 歴史などよりもっと教えるのに特化した授業が増えるといいなと思います。
- 強く要望するわけではないのだが、教員採用試験をもう少し意識した内容にしていただけるとうれしい。
- 教員採用試験に関する指導をもっとしてほしい。講義内容だけでなく、教職課程をとっている学生の皆さんがどのような意識で教職課程に取り組んでいるのか、どんな教員になりたいと思っているのか話し合う機会があったら面白いと思う。
- 取得難易度が上がればいいと思う。そうすることで、「北大出身の教師は素晴らしい」という評判を全国に広め、全国を掌握したい。
- 不条理な厳しさはなくしつつ、程よいきつさを保ってほしい。

2025 年度 教職科目(教育心理学、特別な教育的ニーズへの理解と対応)の点検・評価

教育心理学

(2単位、1学期・木曜5限、対象：2年生～、担当：川田・加藤)

・**授業の目標**：幼児、児童及び生徒の心身の発達の過程及び特徴を理解する。また幼児、児童及び生徒の学習に関する基礎的知識を身に付け、発達を踏まえた学習を支える指導について基礎的な考え方を理解する。

・授業計画：

第1回：授業の概観（担当：川田）

第2回：学習と発達についての考え方とその歴史的変遷（担当：川田）

第3回：学習の理論（1）主要な学習理論について（担当：川田）

第4回：学習の理論（2）学習動機づけ（担当：川田）

第5回：学習の理論（3）教授方法と学習の関係（担当：川田）

第6回：発達の理論（1）ピアジェの感覚運動期と前操作期（担当：川田）

第7回：発達の理論（2）ピアジェの具体的操作期と形式的操作期（担当：川田）

第8回：発達とは何か？：授業紹介とともに、発達の的に考えることの要点をつかむ（担当：加藤）

第9回：理論とは何か？：基本となる理論＝見方を習得する（担当：加藤）

第10回：環境要因の重要性：虐待から発達のつまずきとそれがもたらす問題について論じる（担当：加藤）

第11回：気質と環境の関係：発達障害を取り上げ、個人的要因と環境的要因の関係を論じる（担当：加藤）

第12回：児童期の問題：発達障害を取り上げ、認知発達と運動発達という側面から論じる（担当：加藤）

第13回：思春期の問題：ひきこもりについて取り上げ、社会性の発達という視点から論じる（担当：加藤）

第14回：集団の病理：いじめを取り上げ、児童期-青年期を通した環境の問題を論じる（担当：加藤）

第15回 授業のまとめと試験

・**アンケート結果** 履修者数 179 名、回答数 121 名（回答率：67.6%）

1. 履修前に、この授業に期待していたこと。

教師として授業を行ったり子どもと関わる際に役立つ心理学的知見からのノウハウや心理学的な知識を知りたいという期待が高いが、教職に関わる単位取得のためという回答も一定数みられた。

一方で、「心理学全般に対する関心から」という回答もあり、教職履修の意思が未確定な学生も履修していることがうかがわれる。

<回答をカテゴリ化して集計：（ ）は回答数（重複あり）>

- ・生徒の心理の理解/心理的な発達（19）
- ・生徒との関わり方/生徒の指導や成長にどう関わるべきか（19）

- ・心理学的に見た教育の指針/心理学的に教育をどううまくやるか/有用な指導方法/動機づけの方法 (16)
 - ・心理学全般への関心 (15)
 - ・教師になるための心得/教育に必要な力/教師としての倫理観 (8)
 - ・いじめへの関わり方/発達の諸問題への対応/生徒指導の行い方/問題行動への対応 (7)
 - ・教師の心理 (2)
 - ・その他 (16)
- 教員採用試験に役立つこと/教職における心理学/教師として学んでおくべき心理/教育について心理学的観点から捉える/教育における心理学の重要性等
- ・特になし、単位取得のため (19)

2. この授業を受けて、この点がよく分かった、また身についたということ。

「特になし・無回答」がほとんどなく、この講義を通して「学んだ・身についた」と感じている学生が多いことがうかがわれる。前半と後半の主なテーマと思われる内容がそれぞれ挙がった。講義前に期待していたことと比較すると、ノウハウ的な内容よりも見方や考え方を学んだという回答が多くみられた。

<回答をカテゴリ化して集計：() は回答数（重複あり）>

- ・いじめについての考え方/いじめている・られている子の心理/いじめの進行のしかた/いじめへの対応 (30)
 - ・子どもの発達や学習について/発達段階 (22)
 - ・物事や他人との関係を多角的かつ理論的に見る力/見方を変えることの重要性 (17)
 - ・虐待する親の心理/虐待への対応 (11)
 - ・生徒の行動に対する見方・考え方/問題に取り組む基本的スタンス/特性だけでなく背景にも注目する (10)
 - ・適切な指導のしかた/生徒への対応/生徒への向き合い方 (8)
 - ・発達障害の理解/障害を持つ子どもへの対応 (7)
 - ・その他 (28)
- 教育心理学について/実践を知ることができた/人間の特徴を知った/子どもだけでなく大人の思考・心理も知ることができ心理学として面白かった/課題に直面する児童への対応/時には課題を変える 等
- ・特になし (3) ・ 無回答 (1)

3. 授業内容で印象に残ったことや感想。

回答者の半数以上が何らかの回答を記載しており、この講義が受講者にとって印象深かったこと、有意義だったことがうかがわれる。前項目と同じく、見方や考え方に関する記載が多くみられた。また、実際の例を元にした話が分かりやすかった・面白かったという感想が多くみられた。

<主な回答（抜粋）>

- ・「見方を変える」という考え方が新鮮だった。(多数)
- ・出来ないことより出来ること、なぜがそうしたかよりも何がそうさせたかを考える、分けて考えるこ

と。

- ・できない生徒と捉えてしまいがちな生徒も、その方法ではできない生徒と正確に捉えれば、自分たちができることについて考えやすくなる。
- ・問題行動に対して上から押し付けるような対応をすると、より問題行動を誘発する可能性があるということ。
- ・ビデオで具体的な実験や子どもの様子を見たことが印象に残った。
- ・具体的な事件や出来事をつけて説明されることが多く、分かりやすかった。(多数)
- ・咄嗟の出来事でも落ち着いて、その子がどうしてその行動をとっているのか、ちゃんと理解してできているところを見つけてあげられるような先生になりたいと思った。

4. もっとこのような点について教わりたかったという点。

教え方や具体的な教授法、教師としての行動など、高校生への対応を知りたいという要望などが挙げられた。

<主な回答（抜粋）>

- ・良い教え方。具体的な教授法。
- ・教師の実際の行動。信頼をあげる言動、対応。
- ・高校生に対してのアプローチも詳しく知りたかった
- ・発達と学習の部分は、もう少し事例を用いて学べるとわかりやすかったように思う。

5. この授業について不満に思ったことや改善すべきと思ったこと。

テスト形式で実施された評価方法に関する要望が多くみられた。テストの実施そのものだけでなく、事前の説明や実施方法の分かりにくさに関する要望も挙げられており、改善の余地があると思われる。講義の進め方に関する要望は少ないが、配布資料への要望がみられた。

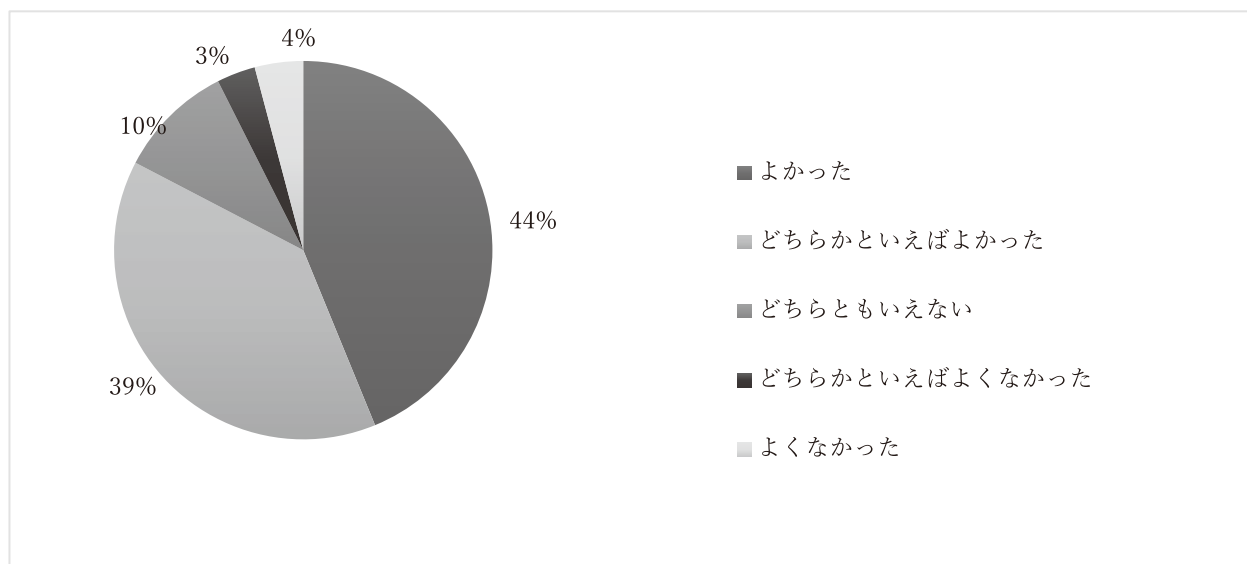
<主な回答（抜粋）>

- ・テストが難しかった。/テストを持ち込み可能にしてほしい。/テストではなくレポートにしてほしい。/期末試験の範囲が広すぎる。
- ・参考書があったとはいえ、参考書に載っているが授業では触れなかった単語についても出るかどうかかわからず、また先生により出題形式が違うのも対策が難しかった。
- ・テスト形式についての説明が事前にもう少し詳しく教えて欲しかった。
- ・テスト用紙の配り方、回収方法が分かりづらかった。
- ・授業内小テストがあっても良いと思った。
- ・一定以上の出席を求めて欲しい。/出欠も点数に含めて欲しい
- ・出席を必須にするか、資料を公開するかした方が良いと思う。出席した人だけが学びを深めることができるシステムになっていると思うが、0か100かすぎると思った。
- ・授業資料をもう少し充実させてほしい。/スライドやワークシートをより丁寧に作ってもらえると助かる。

- ・映像を増やして欲しい。

6. この授業の満足度を5段階で教えてください。

80%以上が、「よかった」「どちらかといえばよかった」と答えており、この講義の満足度は高いといえる。



特別な教育的ニーズへの理解と対応

(1単位、1学期・集中、対象：2年生～、担当:関・安達・岡田)

・**授業の目標**：特別支援教育の理念と制度を理解し、通常の学級にも在籍している発達障害や軽度知的障害を初めとする特別な教育的ニーズのある児童・生徒の理解と対応に必要な基礎的な知識を身につける。

・授業計画：

- 1：特殊教育から特別支援教育へ・21世紀の障害概念とICF (担当：安達)
- 2：特別支援教育のシステム：障害者権利条約と合理的配慮 (担当：安達)
- 3：合理的配慮と支援のパラダイム変換・インクルーシブ教育へ (担当：安達)
- 4：発達障害の理解と支援1 (担当：関)
- 5：発達障害の理解と支援2 (担当：関)
- 6：その他の配慮を要する児童・生徒の理解と支援 (担当：関)
- 7：学習面・生活面での困難の理解と支援 (担当：岡田)
- 8：家族支援・地域支援 (担当：岡田)

・**アンケート結果** 受講登録者 204 名（評価 185 名） 回答 37 名（回答率 20%）

*履修者に対して回答数が極めて少ないため、参考程度とすべきである。

1. 履修前に、この授業に期待していたこと。

特別な支援を要する子どもの特徴や対応・支援方法についての知識を学びたいという期待が高い。また、具体的な事例を通して学びたいという要望も一定数挙げられた。

<回答をカテゴリ化して集計：（ ）は回答数（重複あり）>

- ・特別な支援を要する子どもに関する知識、生徒への対応、教育的配慮、支援方法、教え方（14）
- ・特別な支援を要する子どもへの対応に関する具体的な事例、具体的な対処法の例（5）
- ・特別支援について、特別な教育的ニーズとは何か（3）
- ・特別支援学級や特別支援学校に関する理解が深まる、特別支援教育について（3）
- ・身体障害・発達障害・知的障害について（2）
- ・その他（6）：教師に必要な資質、合理的配慮に関して、興味深い内容、これまでの発達障害に関する授業で習っていないこと、知識を得るための下地作り
- ・特になし（3）

2. この授業を受けて、この点がよく分かった、また身についたということ。

特別な支援を要する子どもの特徴や対応・支援方法についての知識に加えて、障害の捉え方や子ども理解の考え方を学べたという記載が多くみられた。

<回答をカテゴリ化して集計：（ ）は回答数（重複あり）>

- ・発達障害を持つ子どもの特徴、指導法や配慮事項（実例を通して学べた）（11）
- ・実態に合わせて確認する、臨機応変に対応する、子どもの主体性が大切、ラベルに縛られずに環境調整支援を行うことの重要性、病名はさまざまで症状も一人一人異なること（10）
- ・合理的配慮、ICF、障害は環境により生じる、合理的配慮などの支援の大切さ、障害を社会と関連づけて考えること（5）
- ・障害者教育について、特別支援学校や通級などのしくみ（2）
- ・その他（8）：特別なニーズに合わせるとはどういうことなのか、その心構え
配慮が必要な子どもがどうしてそうなっているのか
障害によりどのように困難が生じているかを分析する方法
障害者に関する法律や世界基準、特別支援学校での実習の助けになった、
障害のある人との関わりの難しさ、理解不足・知識不足を感じた
- ・特になし（1）

3. 授業内容で、印象に残ったことや感想。

2にも挙げられたとおり、知識的な内容に加え、捉え方・考え方が印象に残ったという感想が多く見受けられた。また、ビデオや事例の印象が残りやすいことがうかがわれる。

<主な回答（抜粋）>

- ・感覚過敏を持つ生徒の視覚を体験するビデオをみたこと。
- ・最終日の A 事例や B 事例、2 日目の動画の事例など実話を考察するのが楽しかった。
- ・ADHD のビデオ。
- ・「合理的配慮」という言葉の意味。「合理的配慮」の「合理的」が、配慮と相反する言葉であるという点。
- ・合理的配慮という義務は、受益者の権利の行使として自ら申請することによって要請されるということ。
- ・人が持つのは機能障害であり、それが環境との不適合により障害とみなされるという考え方を学べ、良かった。
- ・知的障害、発達障害などの障害の違い。知的障害と発達障害の違いを初めて知った。(4 名)
- ・ASD や ADHD など、診断された人たちに対して、薬物療法が存在し、その方法でサポートすることに繋がるのだということが印象に残った。機能的にもアプローチできる方法があるのだと知ることができた。
- ・障がいを持つ生徒に対して、診断名だけで決めつけをするのではなく、実際にその生徒が困っていることに焦点を当てるべきだという趣旨の内容が印象に残った。(3 名)
- ・配慮を必要とする子供の範囲が自分が考えていたよりも広く、多様であると感じた。一人一人の「困った」に対応し、生徒さんたちが自分の力を最大限に発揮できる環境づくりを心掛けたい。
- ・支援が必要な生徒に対して、どのような場面で、どのような困難があるのかをよく理解した上で、本人の意思や気持ちを尊重しながらできる限りの配慮をするように、周りが意識、行動し、支援をしている中でも、それが適切なのか考えていくことが大切であると思った。
- ・同じ障がいでも異なる教育的ニーズがあることがわかり、教員になった際に意識しようと感じた。
- ・特別支援系は自分には関係のないことだと思っていたが参考になることが多かった

4. もっとこのような点について教わりたかったという点。

具体例を通した説明が分かりやすかったことを踏まえて、もっと増やして欲しいという要望が挙げられた。

<主な回答(抜粋)>

- ・具体的な事例をもっと知りたいと思った。例えば、家族側への支援方法の具体的な事例や、学校側以外のサポートの方法について学びたいと思った。
- ・例を挙げて説明されると分かりやすいと感じたため、増やしてほしい。(2 名)
- ・保護者との合意の結果、特別学級ではなく普通学級に通うことにした児童のその後の対応について。

5. この授業について不満に思ったことや改善すべきと思ったこと。

一方的な講義スタイルに対する不満が複数挙げられた。本講義は3日の夏期集中講義で、各教員が1日ずつ担当するという形で実施している。時間数に対し話すべき内容が多いことから、一方的な講義になりがちであったと思われるが、内容の重複も指摘されており、改善の余地があると思われる。また、配布資料に関する不満が挙げられ、改善が必要と思われる。

<主な回答(抜粋)>

- ・話しているだけで聞いかけのようなものもなかったので頭に入ってくるのが難しかった。
- ・聞くことが大半であり、時間も連続しており長い時間集中力はきれがちであった。もう少し当てるなり意見交流を定期的にとっていただけるとありがたい。
- ・説明や資料が非常に分かりにくかったのも、もっと図や写真などを使うなどして改善してほしい。また、授業資料は分割して配布するのではなく一コマごとにまとめてほしい。zip ファイルで授業資料を配布するのをやめてほしい。
- ・せっかくの集中講義なのに内容が結構かぶっていて時間を有効に使えていないような感じがした。合理的配慮のような重要な内容がかぶるのはいいが、それ以外でも結構かぶっていたため。
- ・なぜ教育学部の授業で置換できないのだろうか。新たな学びや振り返りの機会があったことは確かだが、担当教員が受け持つ学部（「教育心理学講義」など）を多く受けていたほど、今回の内容がそれらと重複していたこともまた事実。

6. この授業の満足度を5段階で教えてください。

78%がよかった、どちらかといえば良かったと答えており、この講義の満足度は概ね高いと思われるが、「どちらでもない」と答えた学生も一定数みられた。

